

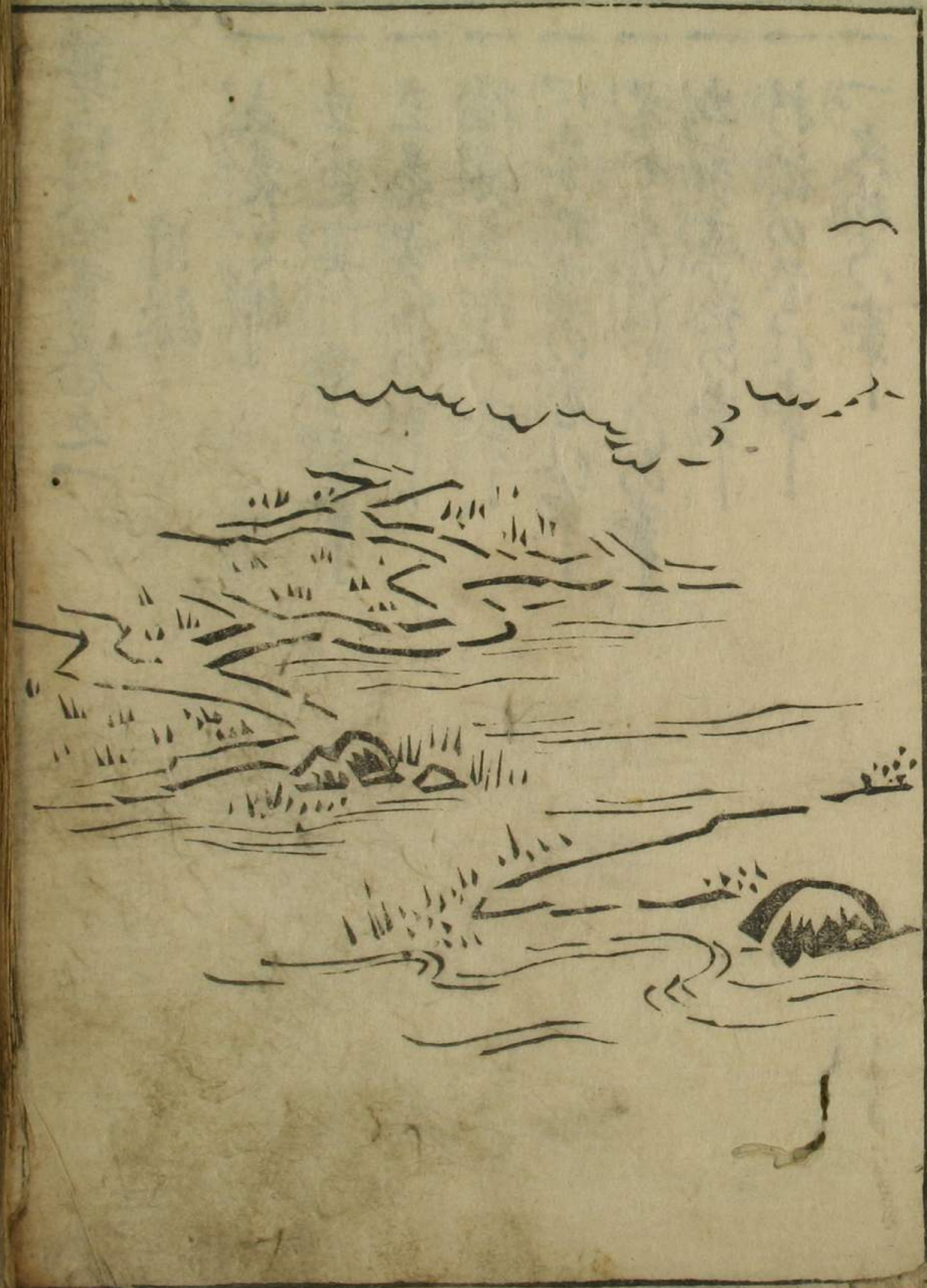


花道全書  
完

79  
714



月ヲ多  
ウ14  
巻



華道全書卷之一

目録

- 一 立花之辨
- 一 立花真行草之事
- 一 立花芳粧之事
- 一 極真立花入事
- 一 四季相違の毛之事
- 一 衣かひ後かひの事
- 一 出家成花の事
- 一 祈禱の毛之事
- 一 文物乃事

- 一 朋作の事
- 一 佛前花乃事
- 一 祝儀花乃事
- 一 大敷の懸つゝの事
- 一 立花廻つゝの事
- 一 草本さし合の事
- 一 一向立花の事
- 一 徳言小いむつゝ物
- 一 立花小い侍の事
- 一 立花小い侍の事
- 一 真の砂乃物

一 行の物此物  
 一 草の物此物

華道全書巻一

立花之類



物成候へ志とて一々ふとハトと又物ををれむ及志がハ  
 多くあそふ事とて一々ふと色花梅の及柳ハみどりあを  
 くれな井乃共き一花自他乃共が一花居とて一は一は只小水  
 尺樹と用ひく江山あき花梅葉とわくハ一花時不あ花万他乃  
 使興とて一花に美小花梅法梅花とてあそむなり且又小水  
 草これとてあそむとてあそむとてあそむとてあそむとてあそむ  
 花かるとあそむかゆく一花式とてハ花は花梅各別の花梅  
 ハ草本とてこのとてあそむとてあそむとてあそむとてあそむ  
 一とて人とてあそむとてあそむとてあそむとてあそむとてあそむ  
 他意上下ふとてあそむとてあそむとてあそむとてあそむとてあそむ

く人正心別流見然正正とてつれは具はてあひく次第下  
下た心乃枝ありあつひ八除やう別流の若うそれあふふふひ  
て或はよりく或はわろくあひーらの草葉本花さるごと持まり  
草本をさうこれ流とらと梅もあふとく一輪乃中一葉此枝葉を  
わくく人正流葉風流あさすなう一且正葉折く時水のそとて乃作  
意意愛ハその人ふあふん類とた一功とほ今、秘さくあふふふ  
のりれり

立華真行草之事

法道とて骨肉とてとれんも事と成然きれるかう一書昼とてあふ  
の八世其行草すりて筆勢とほく方立花もまこまうり先花形  
真行草あつひ紙をさる時八何あふりて一功とまさん類は人本と  
切花とまらう一瓶よむひーとて真乃草形とあうう一七つれを紙

さごめん又まお紙のひとまの草方本此本と考へ一草一本ふま  
やうまも紙はえとまそれらあ時り人あううくあつひ紙  
具とあつひ波線工とほく水係退れの中流立流流立内別立流  
立流枝指ま本乃花形あつひとて真曲とあふ心とらうとせ此枝あ  
下長短心ままごひてうひう時八花形風流よて一とて花葉ふ足  
下とね一毛紙作れ花形といへてまて行り草ふはとくハハの  
けやう又ハ流線批本の太枝も立相なく或ハ垂く或ハ鐘よまは紙  
とふれ流あやして流とあつひの類なふして別とまらうとて枝あ  
くしとあへなくかさうしとまさん忽紙とあつて一枝もかろる事なく  
出あよまひうす流線とまればうとま紙あつてはとあつはやま  
くくまわつ紙草の花形とてこれ格とまわつて格よあむおとて  
てんたうひふああま紙あつてそれり近代真本も行草あり作ふま

行草あり草あり草のま作集りてこれと九品のま花とあり  
なとゆゑ方化ちりゆるりまきさふいさうんなどいさうきん

直花おぼの事

えま花とさうさんとさうはたま式とさうて初ふ八五のま花は  
さうとほへまこれらゆるり余るま行草おぼりて九品は花  
とゆ練するゆ一瓶敷とほくさう一えまきん自然とユまありて  
おと念思するゆはまのさう合はまおぼりす一ては式よあふ  
やうふかりあつてんいつこのたまてもおぼり念思せんすまてま  
う一人の同初れれは先事とさものおぼり一中は小片  
事とゆとおぼのさうまなう一さふおかりて八事とまてゆと  
ユまもなう一とありさて初らの時八下草とほく花瓶おぼくお物  
ゆらやふ括る一切まよかりかり花まもふおていよなるおこ

世の人まよふまゆりてさうとさうまこれハいまこまははまあさす上  
ま乃るに八下草とほくさう一ま氣とや一下ま乃るおままよ  
く一て見西なままのぬり

撫真ま花の事

花瓶のすはま古法わりとゆとま今ハまらおれ古代今代の花瓶  
ふかりとあまんとさう一花瓶おぼは恰好見合お括る一心ハ若松  
勿論とま花のらゆ初ハま越柳松乃類とあへらまのゆ一松のこ  
とくま花よま合とま一とまかかり先花瓶のたれまとまらま  
ら花よりとまてま花まのまほる一心うら一ハ下れ扱とる凡  
一すう二す花瓶乃たおまらてまげます一ら乃扱へさ一ほら  
ハあま心うら一ふハかあらお括るまのほはなからとま  
くよれあて別とはらうまあまらま細まのハんれ幹細まふら

たのひわー見越の枝らんからーれうーあなりまのむせ道の方へ  
かなひうすなりー見越ハ心乃園と書きてん此樹とほうくは心乃のこ  
ち山とん越くも本乃樹と録しなはかりちうりてん越ハ草  
と用いず樹ハ枝のいそむわうてまのむせんとするさゆみよれ  
うー群のまされらる相とのたのひなりかー石ハ群と議と見合せ  
そのまゆりかごとおれり流枝ハ枝なり異なりハ用一と云ふ  
おれりこれとの枝より各より一記さかんなり心まぐふ別かゆこ  
流らゆひより思ひ水際まて先より母さのるさうすすお直  
れおに流し向一朋たりれうはりといけちりなだかうりす真向  
ゆきく瓶の思どかへんさへ出ほるのたれらもハありるうす但  
又越く最末ハ前後のはらひおりあまほくとも水花噴すハ  
らるるおり朋たりハ心かうーれ下より前後乃とまでと朋とよめ

ろろろ成と波おもみれおもさのり花瓶の中央と身と七つ花枝  
うく雲のいそほりりのおり朋ハ花く来る多きとらうーこれ花枝  
れ中一更流と流のまゆりおれ流のくさりて時ハおとこゆと見い  
のろり時ハ花とて風のくさるたこの花とほはらとのおり

四季相違之花事

花ハ心乃方館自花れ流と書けり先ハ月ハ可恥お生  
すれ時なまハ古あうーとき枝まをさくくさりてすおれわーし  
く一花乃中いそむいそむけわろ芳あさくーくさるやうてん  
るーを水際をさく括るー余おなりてまとのむせの  
をよおをそ夏ハ草花とて芳まを十分ながくこれ花とわ  
らこー群流振おれた具と左右へのむやうおー水際とあ  
くするを水限十分さうて流しーおらうー秋ハ一輪の中ーその





はそこなりおぼりのこととさるる一紙別紙要とさるる  
一色物之事

一色の花はふりのるる同義ありやうふさあてかくとさるる  
まこと金むと文の時もそれくのさふ解るるなりとつらふら  
らにこそ乃名と責解まねなりとて色の如く枝を水ぬき  
撮おぼるるは七とさるるいふふらふさふすの事古法よか  
あーくつとふは似ぬ一さるる人よさるるさるる

朋作之事

朋作のちひをまけり花を道通とさるるさるる一牡丹  
松はどの顔のいさひは傷ありさるる業黄据伴吹照松  
若なごのこもるとはさるるの代りも牡丹相りおふはさるるは代と  
ふらりてさるるはさるるさるる

佛前華之事

先佛壇の言代とさるる見華とほまさはるる一仏壇をさるる時ハ  
花を然とさるる一七ツの枝を水さるるあらひさるるは  
かつふさはるる一仏壇へよてほ愉好とさるるさるるは  
たハ紙本執事とほふらるるは式屏風とほ顔とさるるさるる  
紙多かざれ時ハ盛物とさるる方ハさるるの代とさるるさるる  
とさるるやうふさるるおとねく見合紙要をりはとさるる物ハ  
とりふあり扱とほた紙とさるる紙よながと紙はさるるは  
おれらるる一右長左短ハ花紙とさるる小見る人すりつんだとほ  
佛前一瓶の花乃と紙なり紙乃時ハ今一方ハ左と紙とさるる  
香瓶のまきと流乃すさとさるる心ハとさるるはとさるる  
従事花に得之事





一投ハ後一投ハ湯と云。よけて草本らづきもむすむかぬやうな  
まの命

○心ほろくハ草まをまはらへ心よりハハ草まをまはらへ  
○草まののりや一極西のこころまの時にあつかうかけ物の極ま  
本の極まをまのこころに極まらうまの極まをまのこころに極ま  
まのこころに極まらう道具のこころを極まらうまの極まをまのこ  
ころに極まらうまの極まをまのこころに極まらうまの極まをまのこ  
ころに極まらう

○こころの心ハ極まをまはらへ心よりハハ草まをまはらへ  
は頼まてあひちりふなり

○草まののりや一極西のこころまの時にあつかうかけ物の極ま  
○連続作などの花はらふるらうまの極まをまのこころに極まらう

らうらうらうらうらう

○あまの極まをまはらへ心よりハハ草まをまはらへ  
はらうらうらうらうらうらう

○佛前まの法とまの法のまの極まをまのこころに極まらう  
○相まの心まの真のまの極まをまのこころに極まらう

○草まののりや一極西のこころまの時にあつかうかけ物の極ま  
らうらうらうらうらう

○極まの極まをまはらへ心よりハハ草まをまはらへ  
らうらうらうらうらう

○極まの極まをまはらへ心よりハハ草まをまはらへ  
らうらうらうらうらう

○極まの極まをまはらへ心よりハハ草まをまはらへ  
らうらうらうらうらう

そふ自由ふくたはうの事

○牡丹若葉はふもていづれもあつておのれを銅刀の付るさふもあつて  
かゝる後とあつていふかたを

○一切の草木花鳥をいふは水と土と空とをいふは地とをいふは  
しるしとをいふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは  
心とをいふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは

○梅枝水仙などいふは水と土と空とをいふは地とをいふは  
しるしとをいふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは  
心とをいふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは

まじりていふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは

○花は又いふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは  
心とをいふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは

○はつていふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは  
心とをいふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは

○花は又いふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは

○おもしろい花は又いふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは

○花は又いふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは

○花は又いふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは

○十文字の花は又いふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは  
心とをいふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは

○花は又いふは人の心とをいふは心とをいふは人の心とをいふは

○水係ふたつんたる花の華 廻柱などのおたつてかた  
 ○後へ花葉のまこつとせんとて後枝とてさうりふくぶととも細く  
 うつりてす

○花と葉のむくみのおよむとてさうりふくぶととも細く  
 ちやがはる花葉と射干とあるものほり顔はくさくさ  
 ありはる花とあつて花のうほりまはるてさうりふくぶととも細く  
 さいあつてす

○枝のほらちやうとてさうりふくぶととも細く  
 右大概なりいすてさうりふくぶととも細く  
 さあはさつてさうりふくぶととも細く

真の砂れお

あつて砂のおはまはたやけさうりふくぶととも細く  
 ちやうとて砂のおはまはたやけさうりふくぶととも細く

よさ花の花形せんとてさうりふくぶととも細く  
 かり瓶と種ふことと砂をおとさくあつてさうりふくぶととも細く  
 一なりさうりふくぶととも細く  
 さあはさつてさうりふくぶととも細く  
 さあはさつてさうりふくぶととも細く

行の砂物

行の砂れものいふ形風流りとして若曝あやうよかおの組  
 合さつてさうりふくぶととも細く  
 さうりふくぶととも細く  
 さうりふくぶととも細く  
 さうりふくぶととも細く

草の砂れお

葉の砂朶ハ二株ならん正心せいしんの意い一い方かたふとらなり一い方かたの皮  
 あいさしひ有ある女に株かぶかろこの時ときハ男おとこ株かぶの方かたよりとまとまま枝  
 とおれなり又ハ心のすへ根ねまでまで控かままとえとええ根ねとえとええ根ねとえとええ  
 副た後ごとえとええ根ねとえとええ根ねとえとええ根ねとえとええ  
 かろかるる事ことなりなりとらとららとらとららとらとららとらとららとらとらら  
 とらとららとらとららとらとららとらとららとらとららとらとらら

華道全書巻一終

華道全書巻之二

目録

- 一 草本くわほん花はな系けい多たしし并なははくくやうやうの事
- 一 立た花はなよよとらとらら由ゆ法は草くさ本ほんの事
- 一 樹じゆ本ほんとらとらら法は道だう具ぐの事
- 一 花はなの名所しよ乃の圖ず
- 一 樹じゆ本ほんの枝ううやうやうの事
- 一 樹じゆ本ほんつつぎぎやうやうの事
- 一 ざりざ本ほんの仕様やうの事
- 一 草くさ本ほん花はなやうやうの事
- 一 草くさ本ほん植うええやうやうの事



華道合書卷二

草花の類は、其流の極之事。

○敵天 水くわが流との如きし目くらふりてあつけん水とわ  
くはくはふふあつるのあり

○摺 西王母若摺 浮平摺 船摺 昔の摺いづきも心よりと流にきて  
はくは下に但下ふとらいつらう

○鉢 山岳なふ等てせのわりてたさる心後別也は  
橋球はくしなとたきくと色たる具は流ふたうの月はくし  
も明らりてふはよ

○棧 三多わりのまのまの心後とふかりハ言ふれ枝あり  
歌あいまのいふわのハ中其明也よすの板松とのハ地とのハ  
か利

○松 木のぬかれとて立花をけ入とてふ松花と結実すのぬかれ  
 みしててもかよて色平陰成りら西個下あけりあがり一花あつた  
 と松葉アキ事なるかすれたることと推く和の製法よきとて  
 立ちり一葉を八個まであけてもろしかりす一瓶よ赤白とらふ  
 時ハあやまじく括り一葉を二葉よきとらふらん白ハ白赤ハ赤  
 こととたの縁澤飛せぬやうふまらう

○枇杷 多数とまふはよるう一樹から陽すかよまらう一あら  
 と見すおろ紙さらふおろり朋らうとてはひてう

○柏 ぬいーらむの時ハ多数とみせ九とせらむ心位よハ多数は  
 心位群よかりハ枝つとて古本なうとてハ成るう一葉の裏は  
 とてうすたハ毛とてて性中りうふて水よよりあけく一  
 紙のちりさハ水よはう

○楸 木 はふいあまーとてと先ハ朋他よりらゆりものから  
 こみふハはふらうまれぬり

○若 一葉の中ハはくぬもはふ若木本ハ何とてとわら  
 はらう神とてとぬおならう一神ハ梅松梅のあさばトぬり  
 いづれ本よてもおみよのぬりう樹は若枝ありとてぬり  
 うらうりのぬり松梅をよハ落すくそと影と西ありてや

○櫻 神ハ梅松梅拍松拍柳梅のたつとぬりはひひやう乃  
 うらうの若よはひとて何色の木よても神よらうてぬり  
 むぬらう

○春 木の松ハ根と切とて水よはけくう根あさハ水よ  
 春の木の根と切とて水よはけくう根あさハ水よ

なむそをわ———。またかへ入ともふは花と結実すのわねえ

○春菊 春菊ハ二種ありてハ新ハ花のまは法美なりよゆハ秋の  
むらり人ありこははちひありよ免ハ秋の花ハ秋の井さく  
とのよものあり

○福寿草 花をわらぬは花なり花乃ち令色ありて細  
うなり葉のわ菊あり

○天南星 ちりぎの葉は花をさぐりよりちりぎあり  
また水仙の葉なり

○菊 胡<sup>あや</sup>く菊は切て植とて水おほけさる—あまうら  
そぐくはく—と一名の時ハ大株より申株までハ心はけい  
ハ大株ハ中株ハ申中株ハ下ふ夜秋ともおほくさる—

○水仙花 花ハ下えりおほくす上のうはりおとらてはよ

事あり葉ハ下おとらともはけい捨はかり花よめま—とあり  
後美ハまな花ものまはけいハ物の—<sup>し</sup>まはあまのこ  
—実見らる—一名ハ一鉢の中ハ一本二本ハふととも求めて  
植まへんぞ

○葛<sup>いす</sup> 葛ははけいのみすするも葉一なりむ葉のまは葉  
ははけいやうに傳わり腸<sup>ちやう</sup>ありとらちのまねなりと—ま  
はよる—根と湯はま—ちうひ水よあ—とて

○射干 花ハ秋ありちり—とて花をさぐりよちり—め  
ゆ—の—は花よほま—とてはく—柳要とすむと  
ちり—とて目のはまらとらとら

○芍薬<sup>しやくやく</sup> ちり—とてはよる—とて花をさぐりよちり—め  
ちり—とて花の葉をさぐりよちり—め

高直りあめかすりえきまの末文の初つゝいひれよめかれをも  
備へりやむく秋も寝のあり

○成書尾 漸のこゝやう切えわりをきいゝあすらちやふのち  
一たりのたていさむく正心さうさまでものかり撰よるに流抄の  
なりのさういさびあひまもおくち同じおひさうすくお

○葵 <sup>あひ</sup> 立あひいふ心より細とあ葵の水際ふおさうり小葵ふ  
下よりあの上まで洗ふやう一ゆとこあありのおりの小葵はす  
紅と白と水あひい世一をかり

○茶藤 <sup>やふ</sup> ちごりのまのおりあまの寝させんちうやまーま  
切くほよ水よはげてもさういふ笑もあー又一ま水は  
もゆゝいむあもりあうたあなり

○歌 <sup>うた</sup> あぶこなごふはくまうのあうゝわりの花枝せ  
ふはくーてりー秋れ小菊よけおとかりまう月おちやあり  
ハ振とやあまのふれくけ時ハ振とやまてりー秋ああまあり

○蓮 <sup>いん</sup> いま水ふもくさーくおやさー一籠せんともふ期  
さるるー赤蓮ハ水およりくおはははりーあ花汁合さ  
漸とりくくまの美さうさーこん自由よああてはふあり

すハ一草一花おハあおゆーいさあおたりむ花の敷とまお  
はふお敷も一本あくも二本あてもまおの敷よまらうーおり  
花あももあより合さうーこん自由よああはふあり

○小車 一まありのまありの花ハ美かりてまはうく振とこさ  
ん水よつりく花もゆりく千まハ水よさうす小車ハ水さうま  
つらよさどくささあわらう初らる人ハおははあああ

○女席花 <sup>めざき</sup> 美かりと白とお花のり水さうふさうはまあめよ

はくふ人あるものなり

○罌粟 かうあまきさるころは油くは風流のりしてたのこ  
はわり何れと水はほげくもぐびうのむく花のむくふまこひ  
くもとあらぬのかり撫さるとあひ捨るべ

○世尊草 両枝ありさうらへは枝ひりて花を満すす後を  
廢らあり正心をさふり

○鶴鹿花 二枝あり銀杏形なり花壇よりゆり時花のかり維  
れしははひぬきさうらへり

○牡丹 心徳非しはくふ時ハ狭れりあふとするなり花よりあふ  
水よりさうらへのかり下ふつうあ時ハちやぶとから用ひてう  
ト紫しあねありはくハ水はほげくさなる母さよハとほらふ  
種あり一は久遠無きよて花首はあふりのかりにまよ

咲はしるる花のさうらへり

○芍薬 種あり一合は砂金二枝飾れくより二本こ  
本さうらへのかりはあハ一と本なるんを他二本は白きよ  
一は紫ありつうあも二本と本つあのをつうあなり一帯づ  
かさうらへりわきさり

○牡丹 通用のめなるは花はなつとさうらへのかりハ二月のた  
盛なり二月のかりかりしはあふてはあはれあり

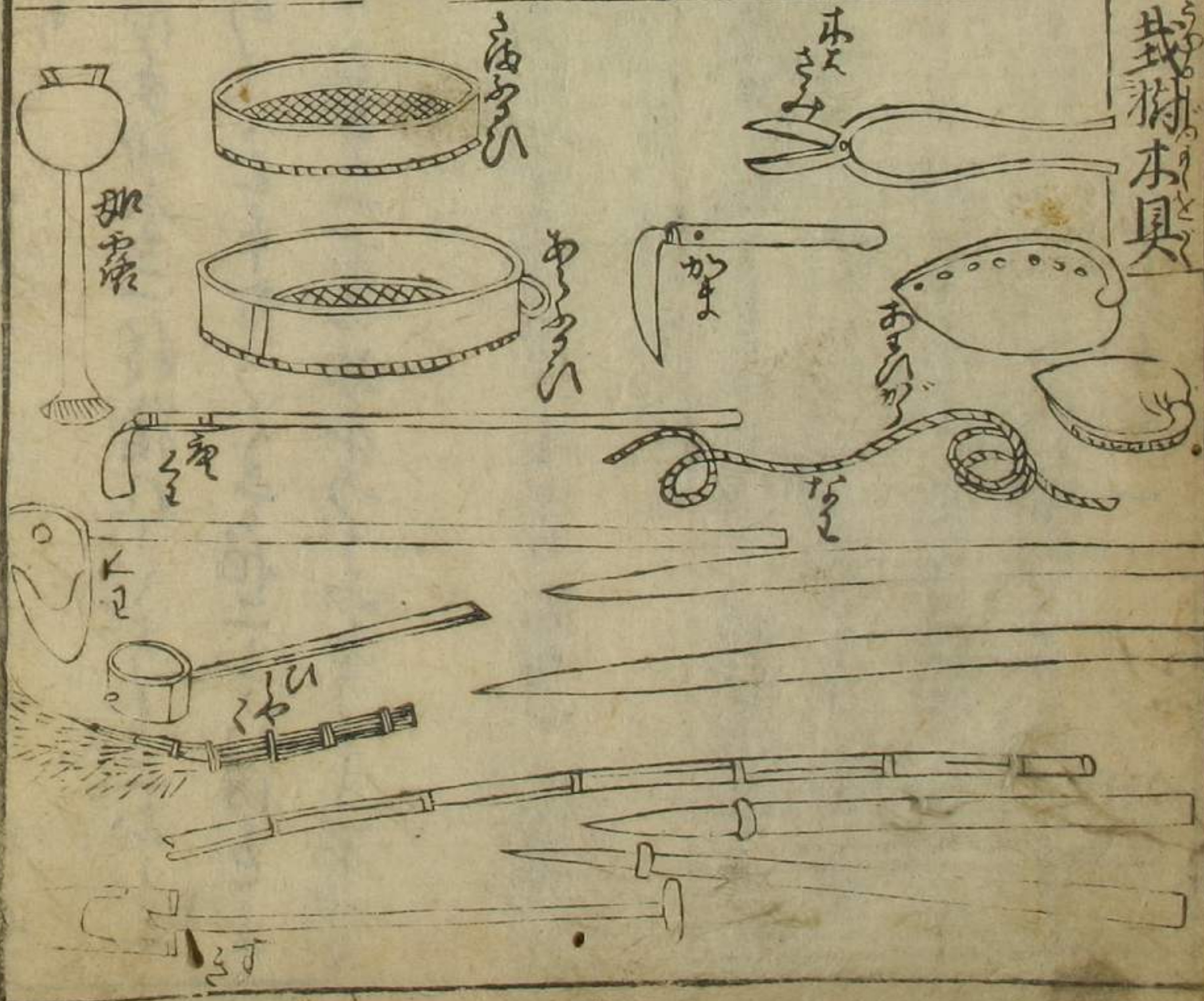
○牡丹 ちのこは花をさうらへりてはくハ水はほげく牡丹はあはれ  
む言位から物あかりむきさるふきさる人しはくハ水はほげく

○竹 竹ハ八月を以てさうらへりてはくハ水はほげく牡丹はあはれ  
れと一花とくさるんをさうらへりてはくハ水はほげく牡丹はあはれ  
動とのりて申へ水とくさうらへりてはくハ水はほげく牡丹はあはれ

栽樹本法

○先樹本とうあるは正月と  
上旬と二月と中旬と  
三月と下旬と四月八陽を  
翌年の初なるまは木の根を  
根よ金くかきゆりてのち  
ざる板中流をならうて  
のちやうやくをせおむりて  
つとまきし夏秋あはらわ  
しかに根を植むに叶  
はる事ありは八九月ハまど  
りその時ハ根ののけとすい  
ぶんとこありぬやうに根まきと  
といひくち金くかきゆりて

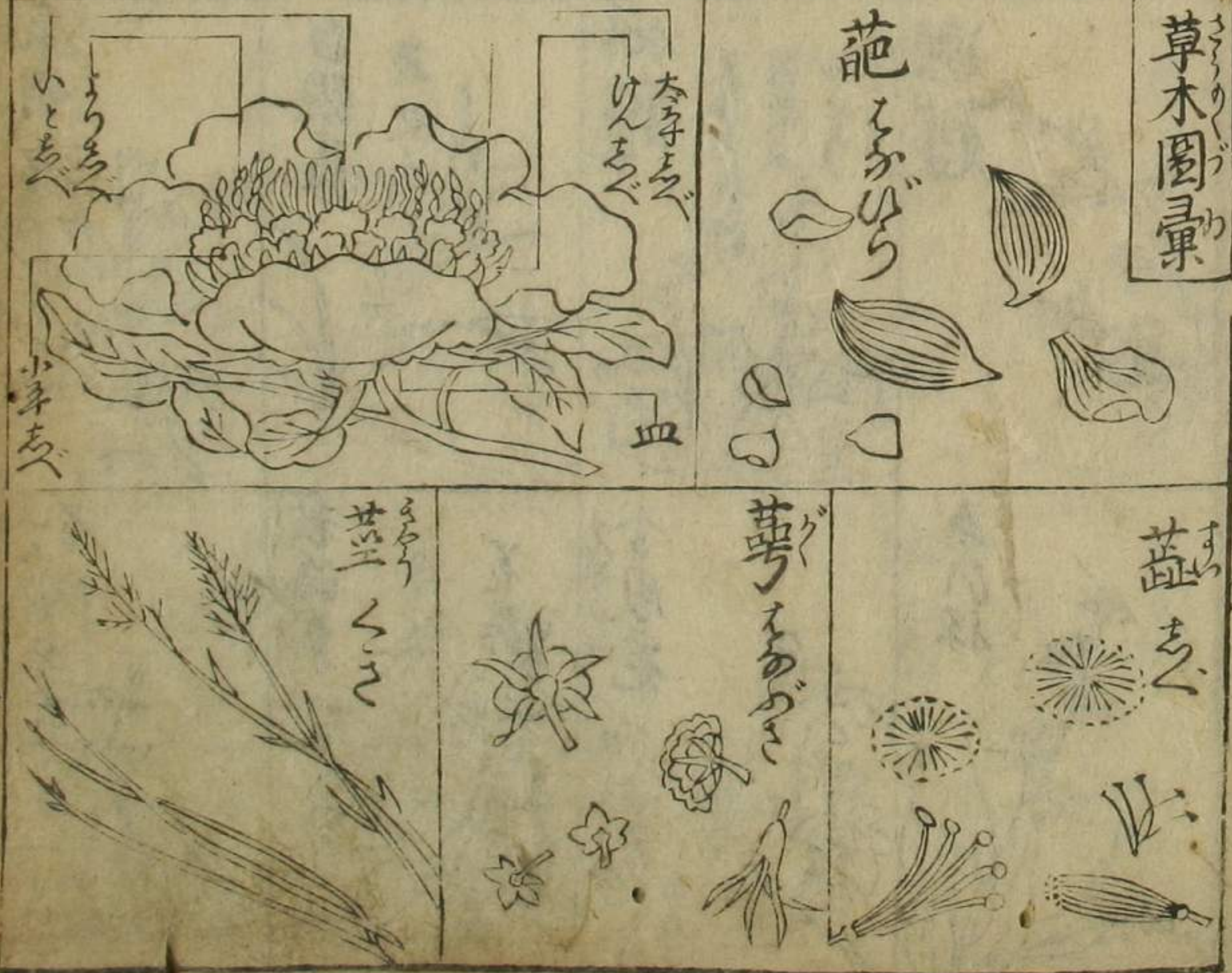
栽樹本具



すきハ法くまのなり

○細き根ハあてももろく  
くはれちさなりハさうして  
密なり種す時根のまから  
さうやう又根のささのまがみ  
やうにすなり一尺根の根子  
まきういてより一尺を南を  
のどくにまきべー花あつ時  
植のゆり事かきし根植す時  
ハ氷とそととちと流泥のめ  
ろ一板のろふ派と入車  
南北ふらこく事良く  
後ちと入かきつこなりと三  
寸ハかきしけぐりハちやう  
りあしてらるわらぐり

草木園彙



澆えとあまごら水市て  
 一喜後二三日ちてふと  
 そぐくぬり風不動これぬ  
 やうよ用きすべしわしのわ  
 礫地のわきまのわ暖ふのわ  
 そのふくの出性と考てう

用意すべし道具

○こくり棒 は八細振扱ひけのあり  
重さありは月長廿式  
尺とほふ尺ニやうあるやう  
 ○すし くさし。あつさし  
 ○後袂 長さ六寸す度さすささ  
のこのとく又八寸とささし  
 ○竹笏 扱とさし ○後鉤  
 美より後なり。木杓



未明 花房あり



白頭菊  
花丈人  
もりよ



水蓼



連翹



合殿 花葉なり



秋海棠



合風花



五匹孫



春菊



墨河骨



舞草



石竹



東菊



佛手柑



赤衣草



玉簪

○穀殼 大小三つあり。小強  
 ○細土篩。粗土篩。噴壺  
俗小ちちちちち  
 右のこく用きせされを耐ふ  
 のが女用と違せぬことある  
 糸一程馬とさるん  
 扱枝法  
 先田去あてしと山あても採  
 かく肥さるり。むか恩ある  
 雨のさかり去られお石と紙  
 着すて水とけ地とささむ  
 ぶり。ねこ。樹の本のめざら  
 てせんとさる。雨の指の肥て  
 うろり。肥とぬれぬて身

おまごて一方の皮を剥き  
 そとに小臼の末と糞とを  
 せり合めり先別の小枝とて  
 さんさん枝のまからさして  
 してあてさして一そぼちと  
 垂まらりさつさかむしと  
 て目の下さしぬきうすて二月  
 程の月ハ白くは目の中も  
 つ水とそぼちと  
 又法 枝のささこを  
 かりぬありさこを丸く  
 させぐ一入す  
 又法 砂を焼酎の  
 かりぬありさこを丸く  
 さしてさす



接樹本法

時分ハ木の法ハ先二年  
 かなる肥とも枝の弱む  
 ころよりよく切す  
 つと徳の皮ハ巻の皮は  
 骨ハ骨おれしとあやう  
 びつあかたむしとさ  
 る一むれ本を本  
 二本つさく二本  
 又一枝ハささ方と切す

壓土條法

本木の枝のさす  
 かきりていた  
 下中さかひて肥と





枝のよふと本の方まじり  
 かけ来の方まじりよとよひ  
 犯あを時よとのとわくじ  
 吹の年本本の方と切て九月  
 中の後うつ一裁だう一九月  
 西の時分根せむるものと色

草木の根

とよそつあ本のめららとる時  
 養とすううひたのひくく雨  
 も養ととくくぬくひ養ハ  
 厚りこたあ一あをまを  
 てより久一と養をむより  
 八月根あふこ一とたうひ根  
 くさる八月雨あ時根せむる時

春の草



揚草



長春草



山あらし

かんじ



馬白



養すううひ。草の乳よ

とよそつあハ二月ハ養分  
 水半分三月ハ養分分水容  
 四月ハ養三分水七分空月  
 ハ養二分水八分九月ハ養  
 半分水六分十月十一月ハ八分  
 養二分の水拾月ハ水とよ  
 せりてより。花と養ハ  
 又ハ馬養と水とよのをけ  
 け花三月月をくひくなら  
 ○植木の処月とあそくは  
 夕月と○朝月ハいよまんだ  
 て中月日ふあうとより  
 とれ。又よまふいよま  
 よハまふくひよまのあを養

一八



かこ



小車



ちる



沙路双樹



芙蓉



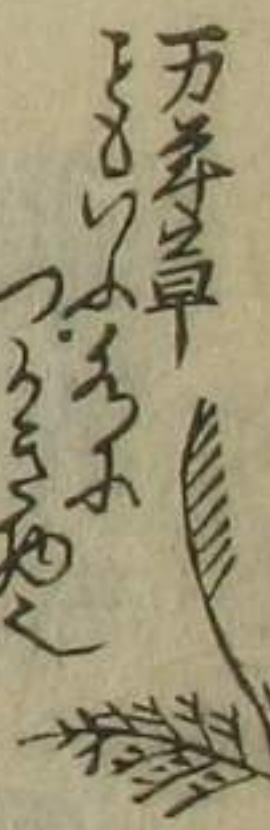
一せぐぐぐ

草木植換

○菊も分ちたるのこまを  
ひろかゝる時を待ててさ  
とそれどもあひらぐり月よ  
くさうて植やさう一又せ  
一こてさけたくなる菊を  
それハあそくこらりあ  
世にハ養ふと用るれ菊を  
植やさう一あひらぐり  
あまハらるまゆとすませ  
る和去と用てさうさう  
大とさああつさそはま  
のさやうげさう一菊よ

あつさそ二月乃まよは  
りまとあわつさそ初て養と  
とさう一梅のあひらぐ  
とさう一梅のあひらぐ  
○水仙 やりさう一さう  
あひらぐさう一月さ水と  
さうさう一さうさう  
作刀とあひらぐさう  
とさう一さうさう六月  
初つとさう一風さ下  
さう七月のま植

厚足



万草草  
つらさう



白樹



まはえ

梅さう



紅葉



秋村



麻

八



赤山



梅本



林本

九福草



うが草



ほろ



檀持



山



虎の尾



ちり





初まのり、初実のすんえ  
 葉と振満よりにわりのかじ  
 〇中車二三月お花へ一秋  
 花うくたよのさひらて他  
 葉の傍とかなるものなり圃  
 うふたすい大瓶の中ふ添と  
 ぬきそまひらるるやうにか  
 けにまへ。〇秋海棠  
 年とあれしとこえかばさ長  
 葉ふたなり二三年とよりとん  
 〇花比とこのひものなり  
 〇菱ひふふまひらるるなり  
 葉のうめふとふ冬あつ振  
 もものつらうせん五月新ふ入  
 てふさく。〇浮陽春の



〇花のほつ花葉のこ  
 〇檀特花 胡麻のおすを  
 〇葉の下のわらう。〇花  
 〇二三月あつてまへにうらぶま  
 の 振二三月ふふひらる年  
 〇はさうてより二三月のばあ  
 らうりやう地よ砂まきせてま  
 〇一苗あげかへんがさげん  
 〇葉の上よまへはくとす後



小枝一々一但春まはは  
 苗生じてきるとひ一ふふ六  
 月のすゑ八月まははと  
 虫なきに長し一やと一花  
 ちの三月は花ひくこや  
 八小枝ぞら水なりこや  
 ○草牡丹 花はよちち種一  
 ○花梅 根より叢生す種と  
 ころり正月花梅一二月そ  
 ころりやと一根まらるとひ  
 くわらまをと多くつけて種と  
 一○梅葉 葉はとひれ  
 思とひひ花と一花はは  
 ころり種一  
 ○身草 種より花を種と



菊小おちり一十月十一月乃活ころりふおちり一花はととまして  
 根まらりにとく一菊虎秋菊より多一毎日辰の中はり  
 己のまると出てこ色とまな一こち人養一冬ま八人養  
 と出てもと海と花は菊菊お美なり○芍薬 今日中ふ百粒  
 あり先芍薬のうやう八月は根とわく一去とらと竹刀おて  
 一や根とまこあつるやうふと一あま田ふより一かど思  
 去より一又油がらなるあせよ一と花とよくありつとそ人養  
 と根ゆりにとげは春花さるなり三年ふと夜とら種と  
 よ一ととまをさひやせとる花はりやと切さうて花と一花と  
 又花下の木枝とつとまな一精刀つらとちなりてう一花かあり  
 綱の刀おてととと切一又花はまりて花とまよ一根は花  
 かしゆりてう一芍薬は花と花とひひ牡丹花といひこち



二つ心

華及金書卷二終

八月九月中はうーあてう秋年八月九月廿日の物とてうー<sup>根</sup>  
 やうくまうーませ合せらるもようー<sup>葉</sup>とてらあてうー<sup>根</sup>の地や  
 せらる地もはる<sup>葉</sup>とて<sup>葉</sup>正月末もまうー<sup>根</sup>又中夜<sup>根</sup>のあを<sup>根</sup>  
 かつ<sup>根</sup>根もそ<sup>根</sup>た又<sup>根</sup>白<sup>根</sup>の<sup>根</sup>と<sup>根</sup>あ<sup>根</sup>なり<sup>根</sup>らうー<sup>根</sup>牡丹<sup>根</sup>の<sup>根</sup>ま<sup>根</sup>と<sup>根</sup>り<sup>根</sup>と<sup>根</sup>て<sup>根</sup>  
 うー<sup>根</sup>もの<sup>根</sup>の<sup>根</sup>ら<sup>根</sup>好<sup>根</sup>む<sup>根</sup>人<sup>根</sup>の<sup>根</sup>あ<sup>根</sup>は<sup>根</sup>牡丹<sup>根</sup>の<sup>根</sup>ま<sup>根</sup>と<sup>根</sup>り<sup>根</sup>と<sup>根</sup>て<sup>根</sup>  
 うー<sup>根</sup>ま<sup>根</sup>は<sup>根</sup>ま<sup>根</sup>ら<sup>根</sup>の<sup>根</sup>ら<sup>根</sup>の<sup>根</sup>は<sup>根</sup>れ<sup>根</sup>と<sup>根</sup>い<sup>根</sup>れ<sup>根</sup>と<sup>根</sup>思<sup>根</sup>ひ<sup>根</sup>と<sup>根</sup>



射乃花



真花



合心





草のむ



行乃不



虚心立行此不



虚心立真の花



除心立真凡花



垂心立草乃花





除心立第花



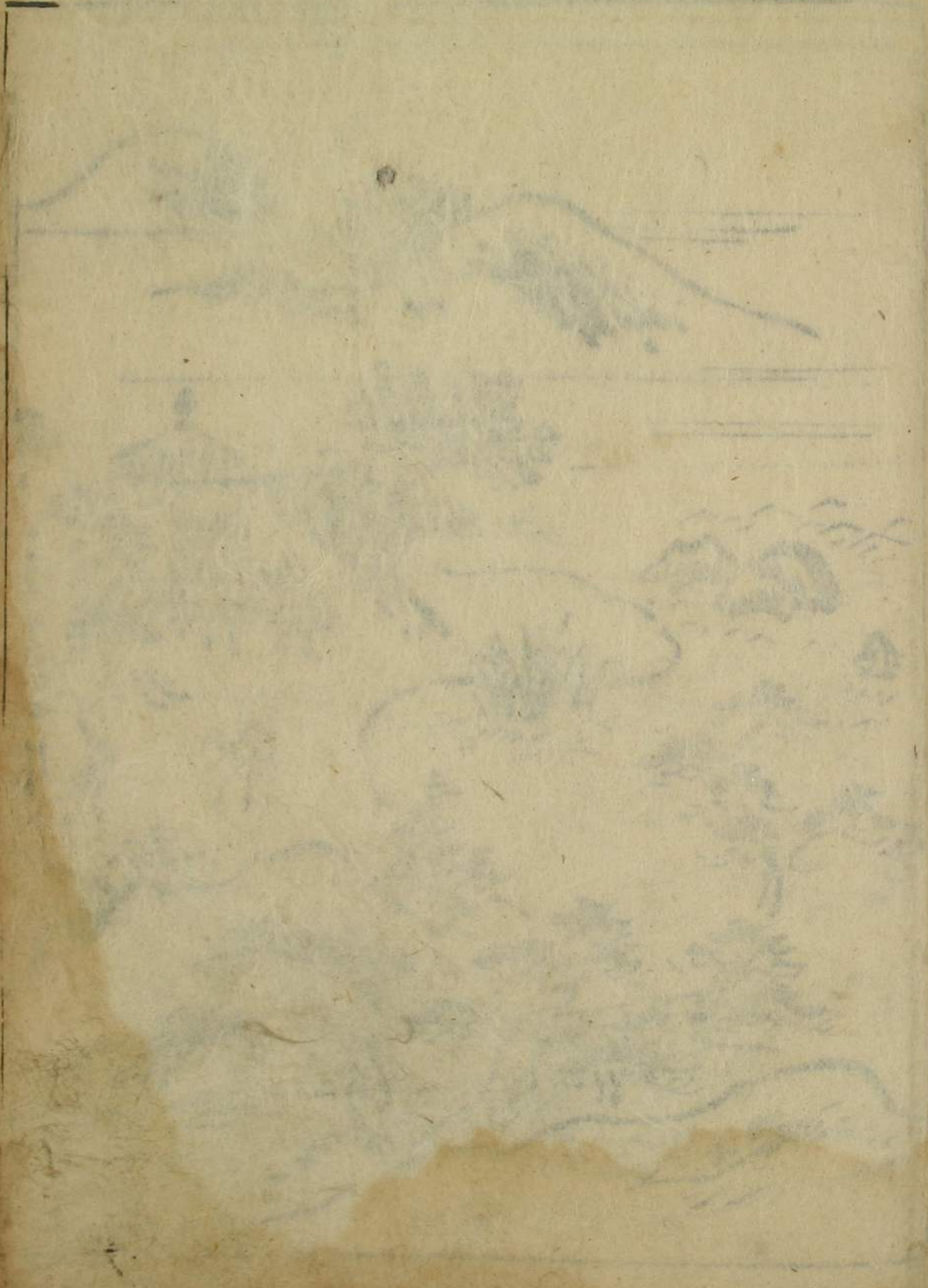
除心立行の花

行乃砂物



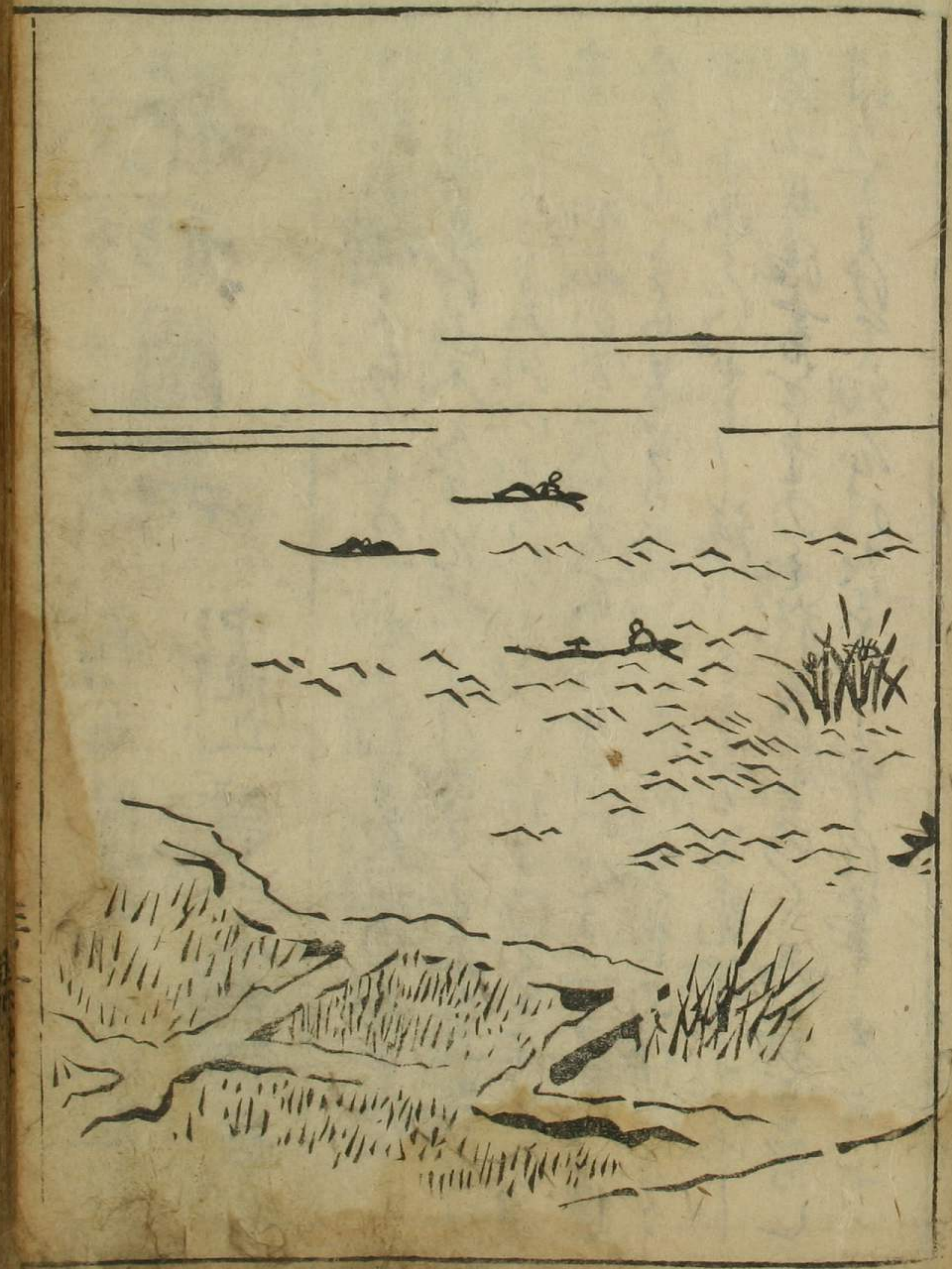
真の砂物





菊の妙也

二〇〇七

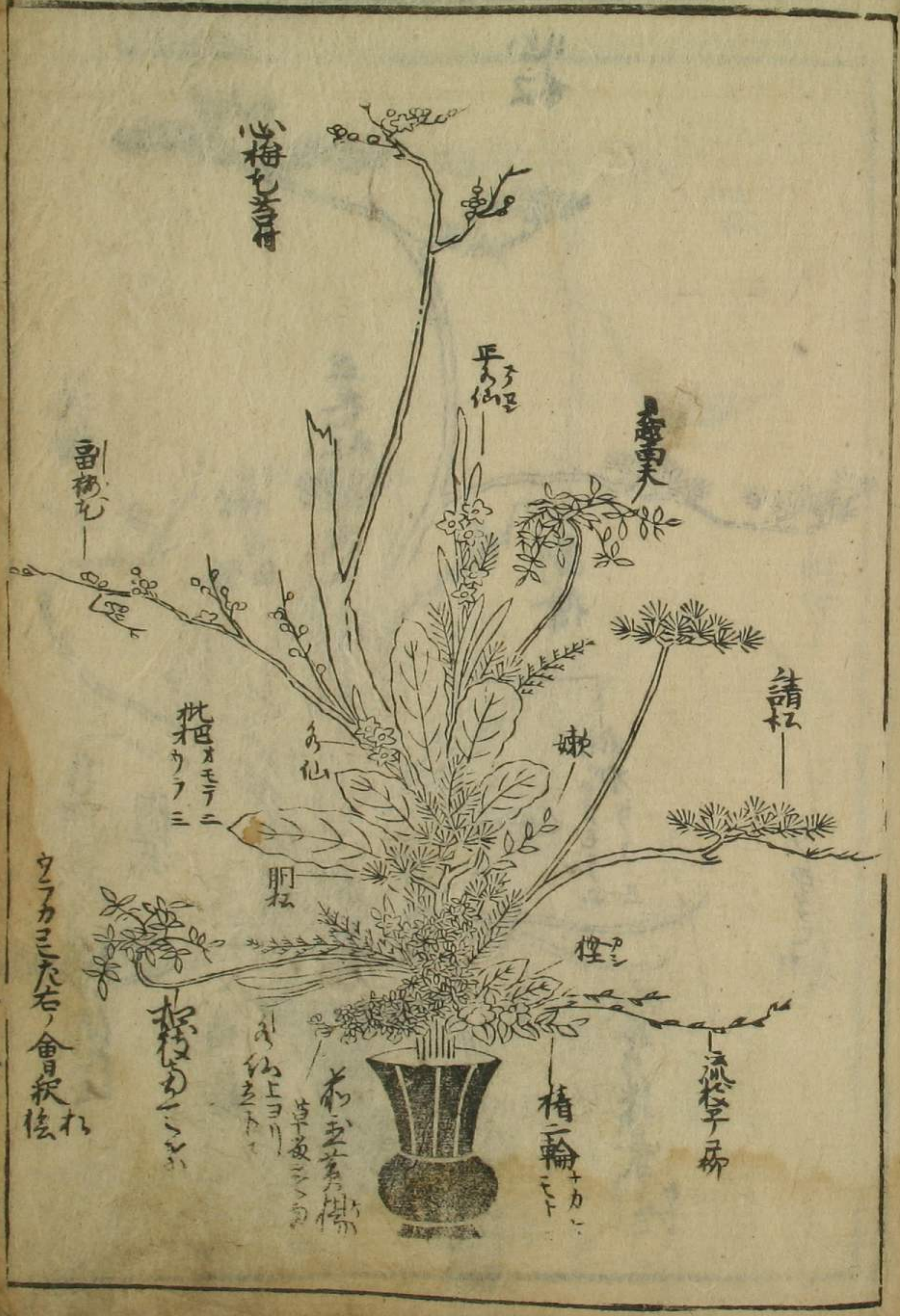


花形圖品

直心立 除心立 四面 内副立

中流立 請上 一色物 砂物

さだお様よりりごめりてせ小嶋の花形の品とけり  
 物よりまげ山ろ志がれた法本れ出せお原乃電海り  
 そゆてるより川の系れくともく何まのくそらんずあ  
 事ハ初ぬのあさへさる所かりきけ見さくる中ものじ  
 今あつさめあせる花形ハ高内質物の作せるが  
 伸子みとにむらう海りてさると虎筆ふうつり  
 益工み法書とそものも物そのものく乃知とまじ  
 けりともひて初ぬれたとげとなは事とまのあり

















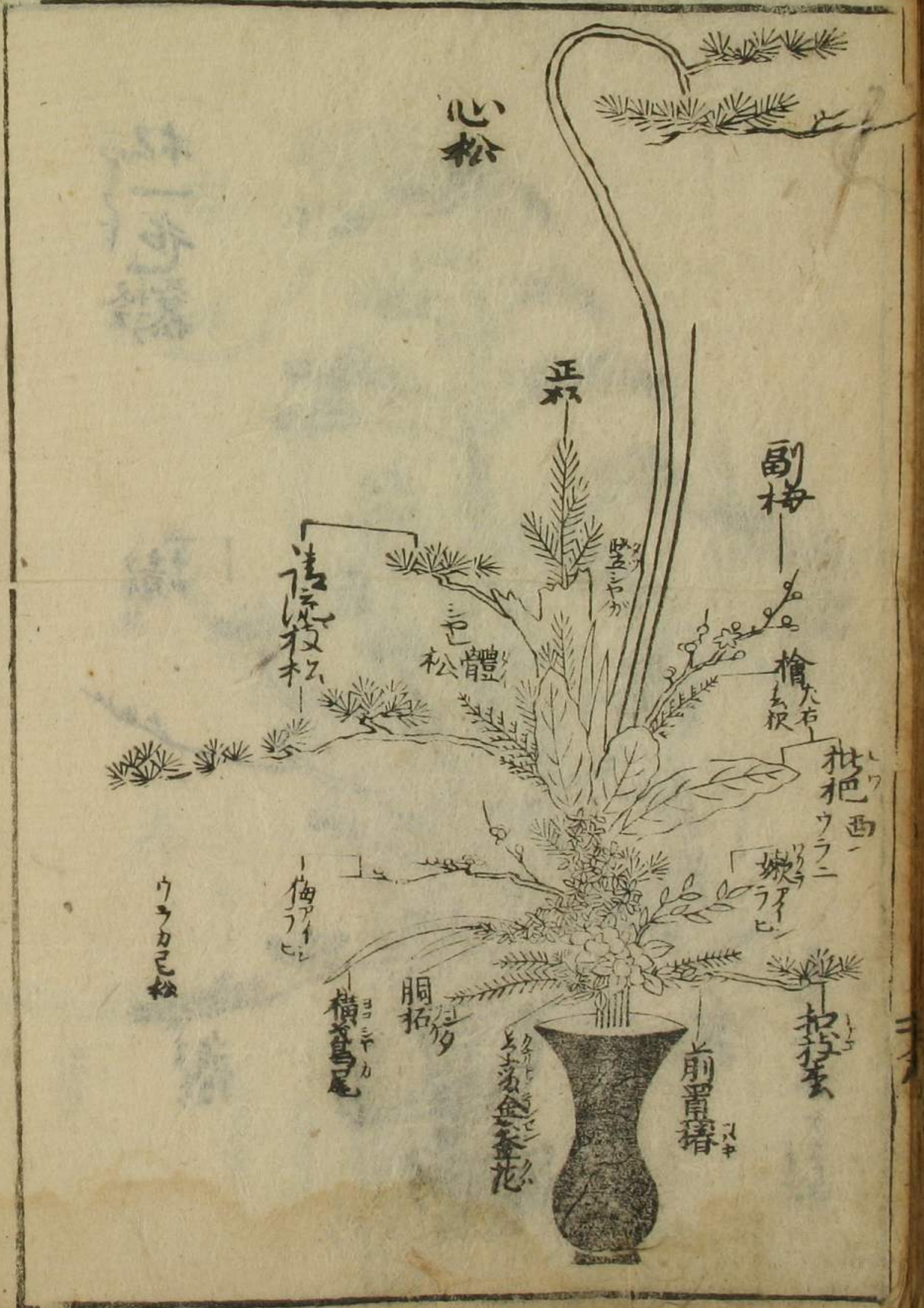
松マツ一色イツキ  
比呂松ヒロマツ



書分之外都テ云振



横松 前置ノ余マ  
流枝ニ用ユ



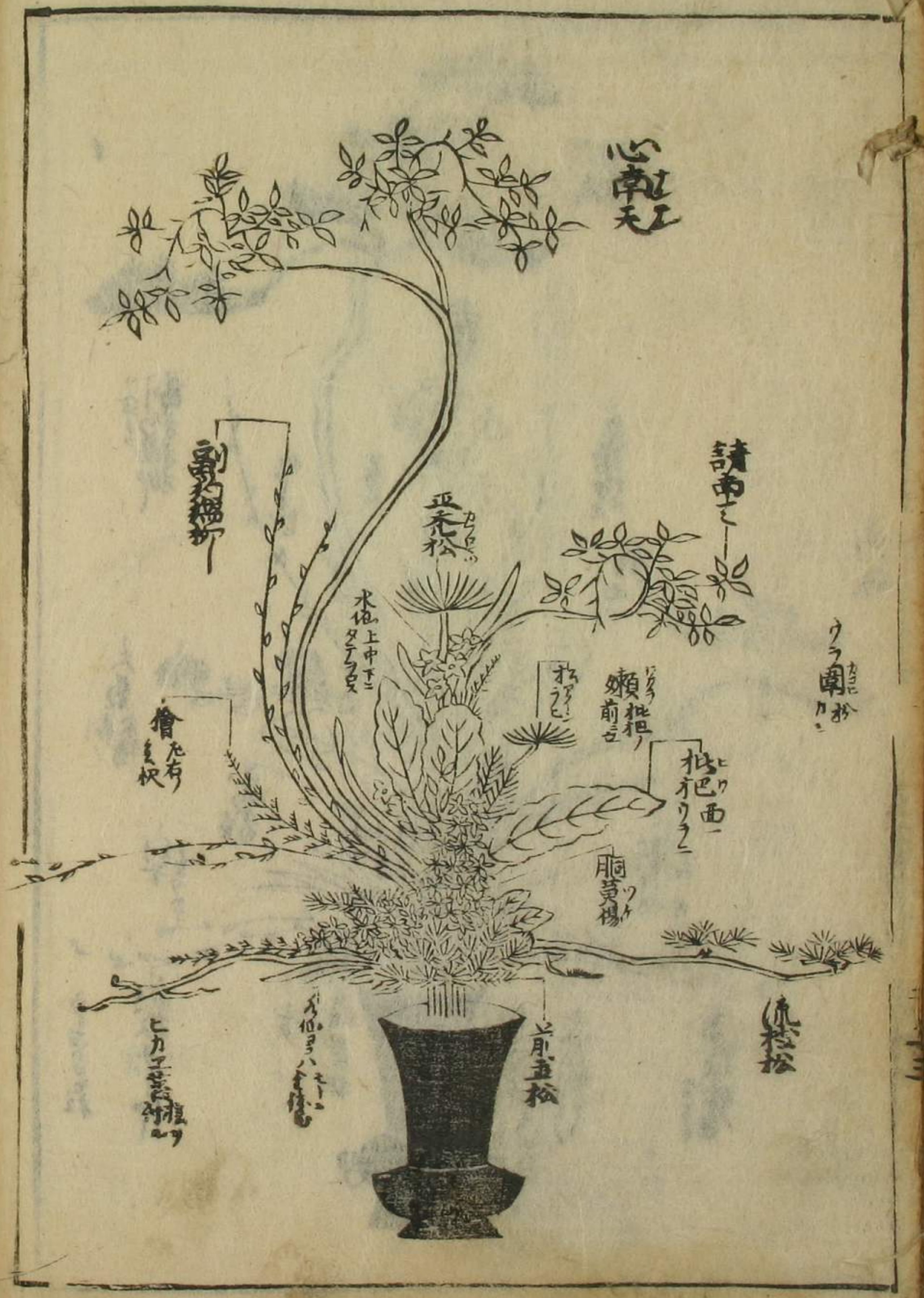
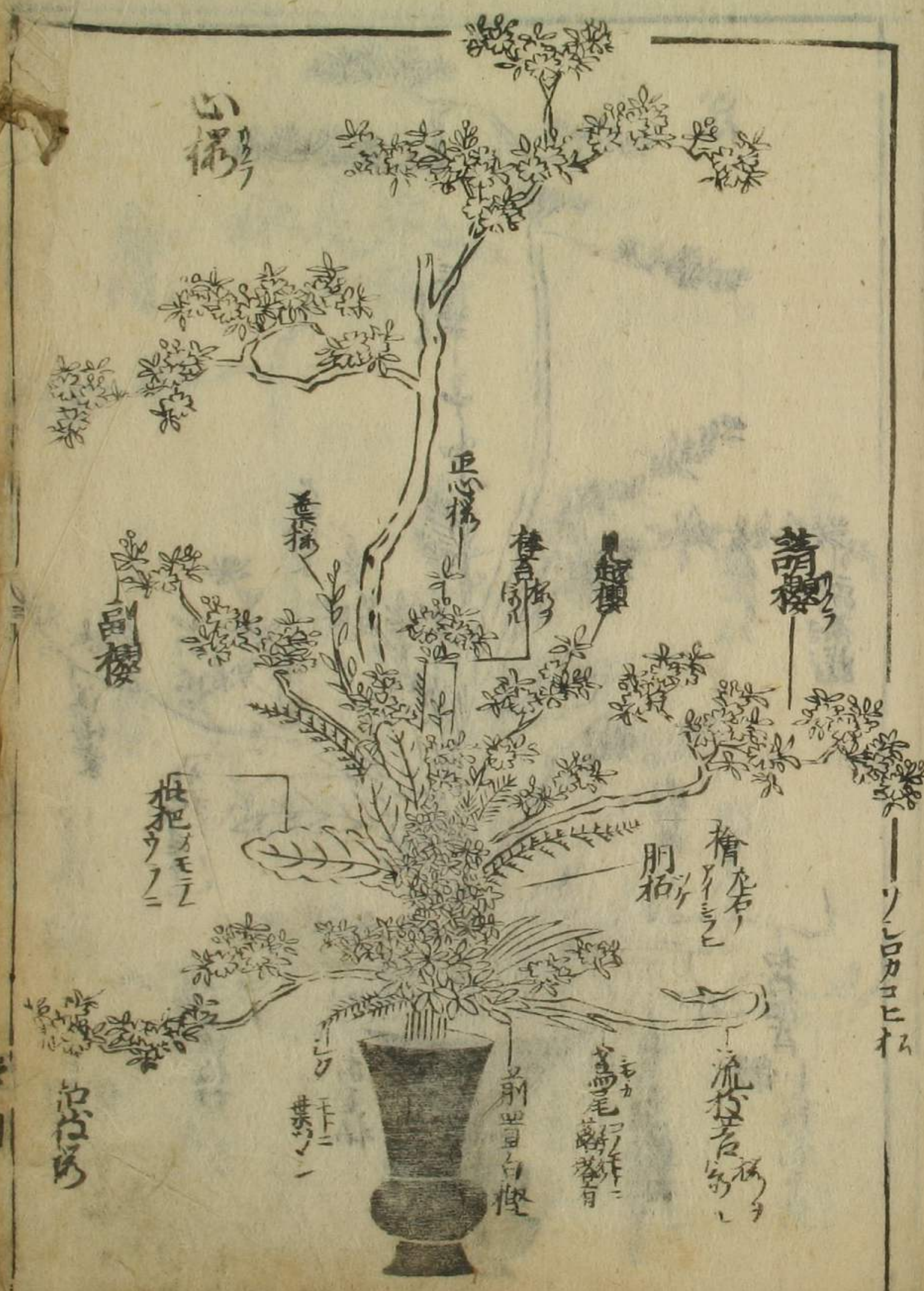


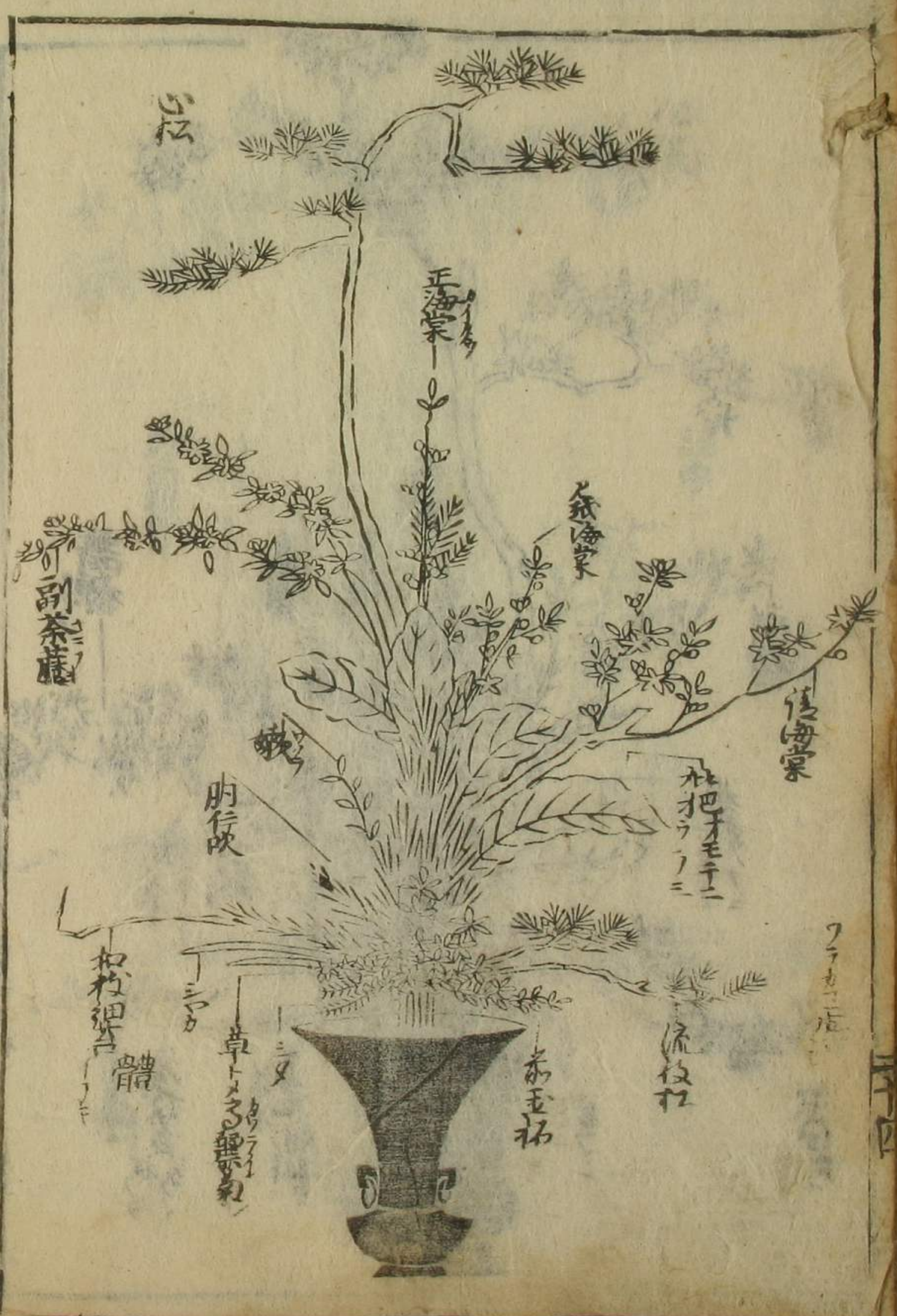














松

正梅

留菰

利子花

ウツミ松

細工梅

橙入根

山鬼

山鬼

白梅

流枝松

那作

種



松

正松

副好櫻

枇杷

佐松

胸袋

ヒカ

金

五松

葉

ウツミ

ナカ

躑躅花









心天 シキヒ

花

請紅 シメツク

副萩 オキ

松 マツ

松 マツ

ウラボシ ウラボシ

針干 カマキ

松 マツ

ト野 ノ

流 リウ

松 マツ



松

大 ダイ

栗 クリ

松 マツ

請 シメツク

副 ソウ

松 マツ

松 マツ

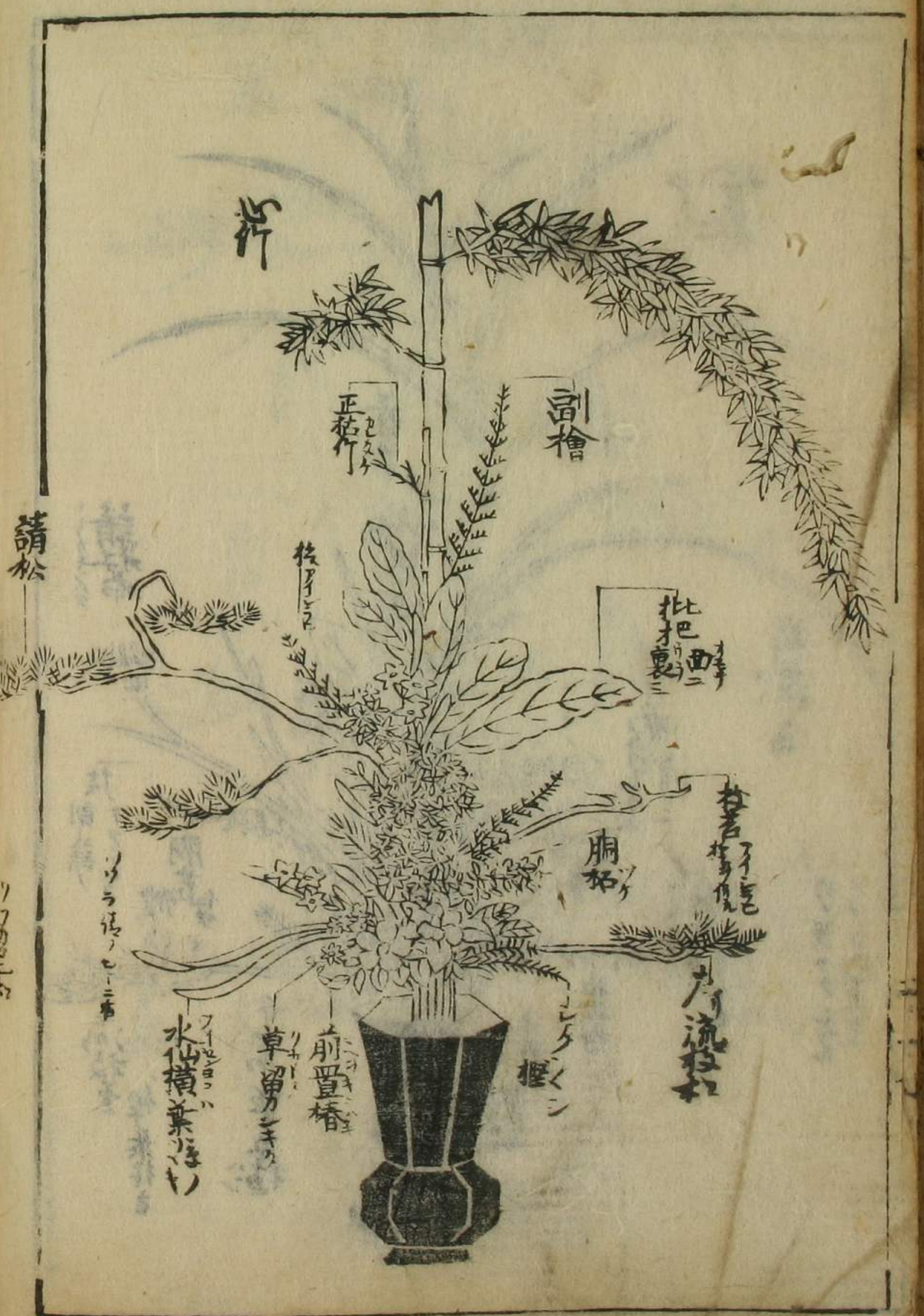
松 マツ

ウ ウ

松 マツ

流 リウ

前 マエ





言分之余皆會釋





一草

心形



芳心

蓮心草

副萩

清菊

蓮心草

射干  
仙應花

山系苑  
ウラニ

水中菊

下野

流枝百合

三ツカ

前置金三豆

次首葉

扣枝夫任白草

ウツリ 谷水降之會祝  
藤梅  
令因心 為百  
自他



副萩

ウラカ松

胆合體

柳葉

正木

見新梅

清柏

扣枝梅

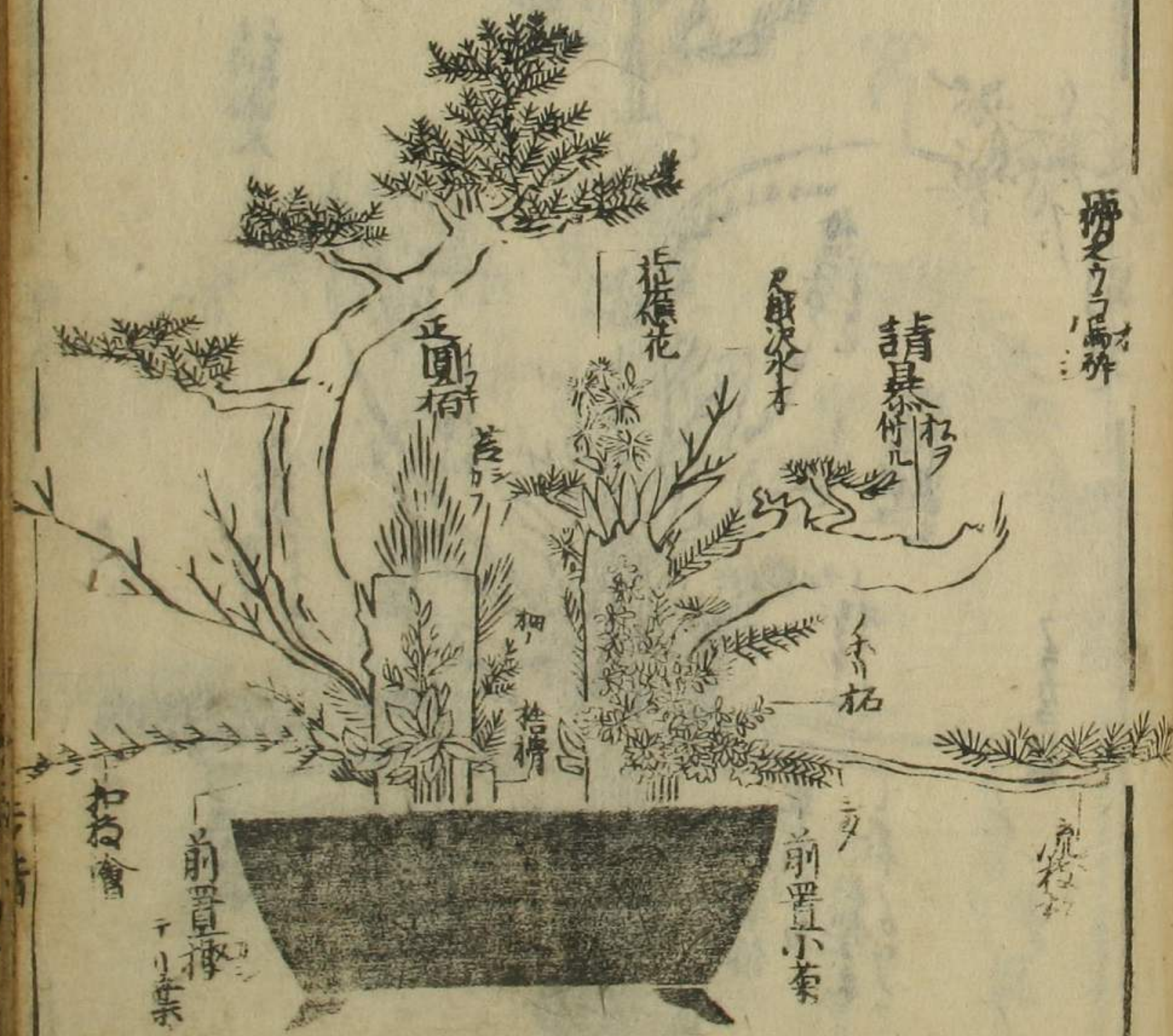
前置椿

三ツカ

中菊  
流枝松

砂之物

心梅



梅之うらな

請暴

尺飯木

花梅

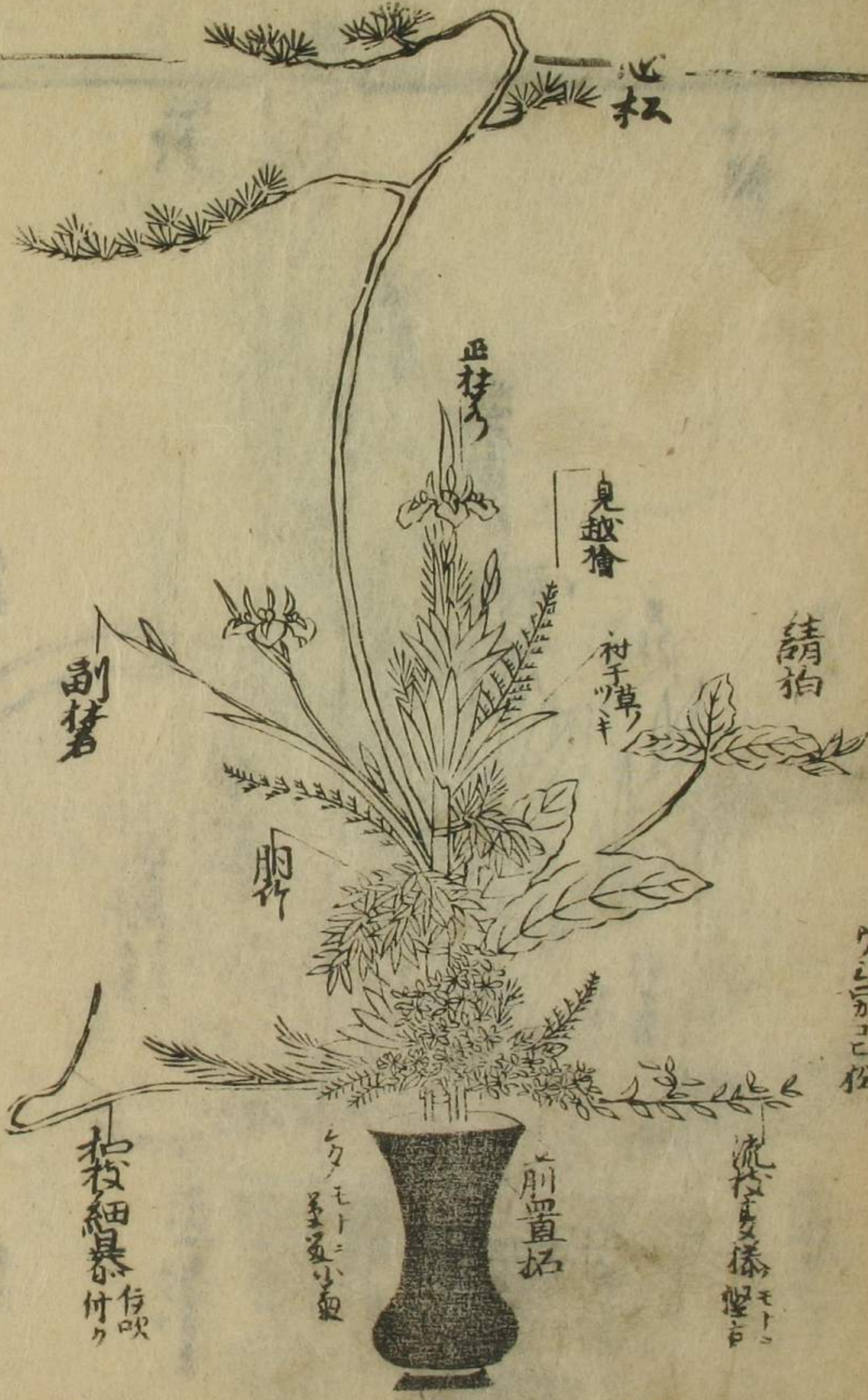
正圓梅

和梅

前置小茶

前置梅

和梅會



心松

正牡丹

見越梅

結柏

副竹

和梅

前置罫

和梅

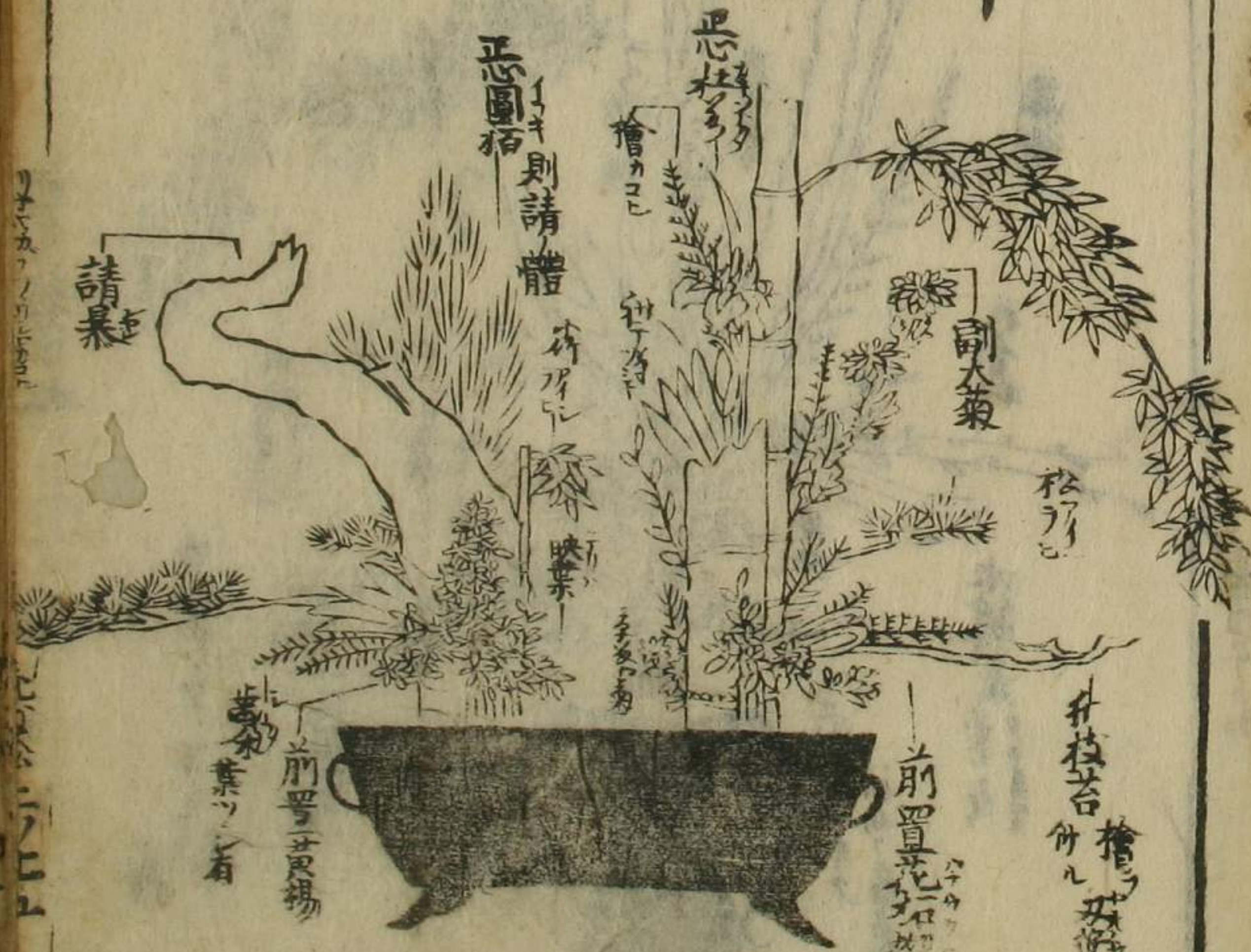
前置罫

和梅細暴

流石

砂物

心竹



請果

正圓石

悪木

副太藜

松

前置花壇

前置花壇

升枝台

石

石

真木

心

清南木

心



副太

檜

枇杷裏

之

松

村

朋

約

前置椿

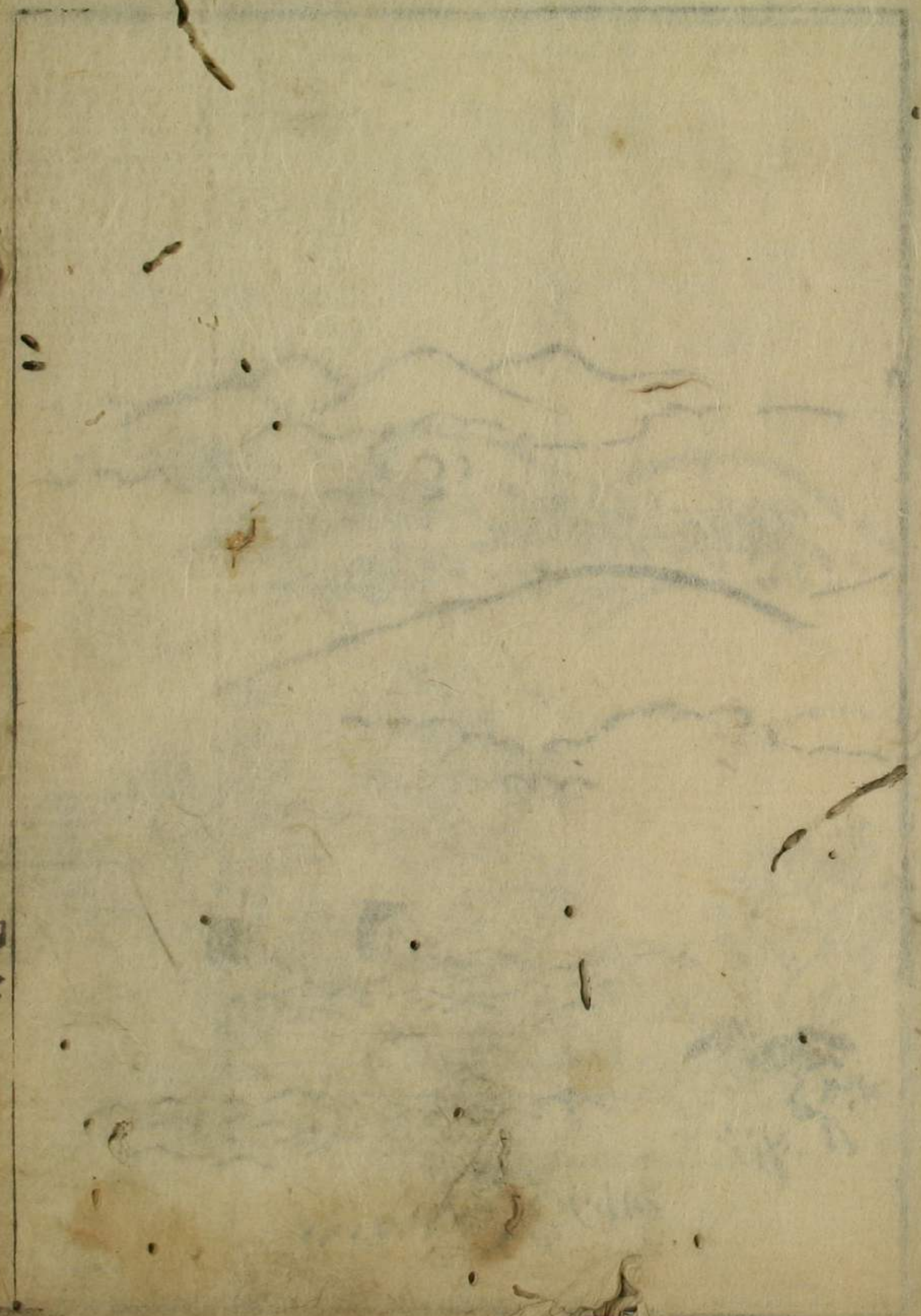
水

元

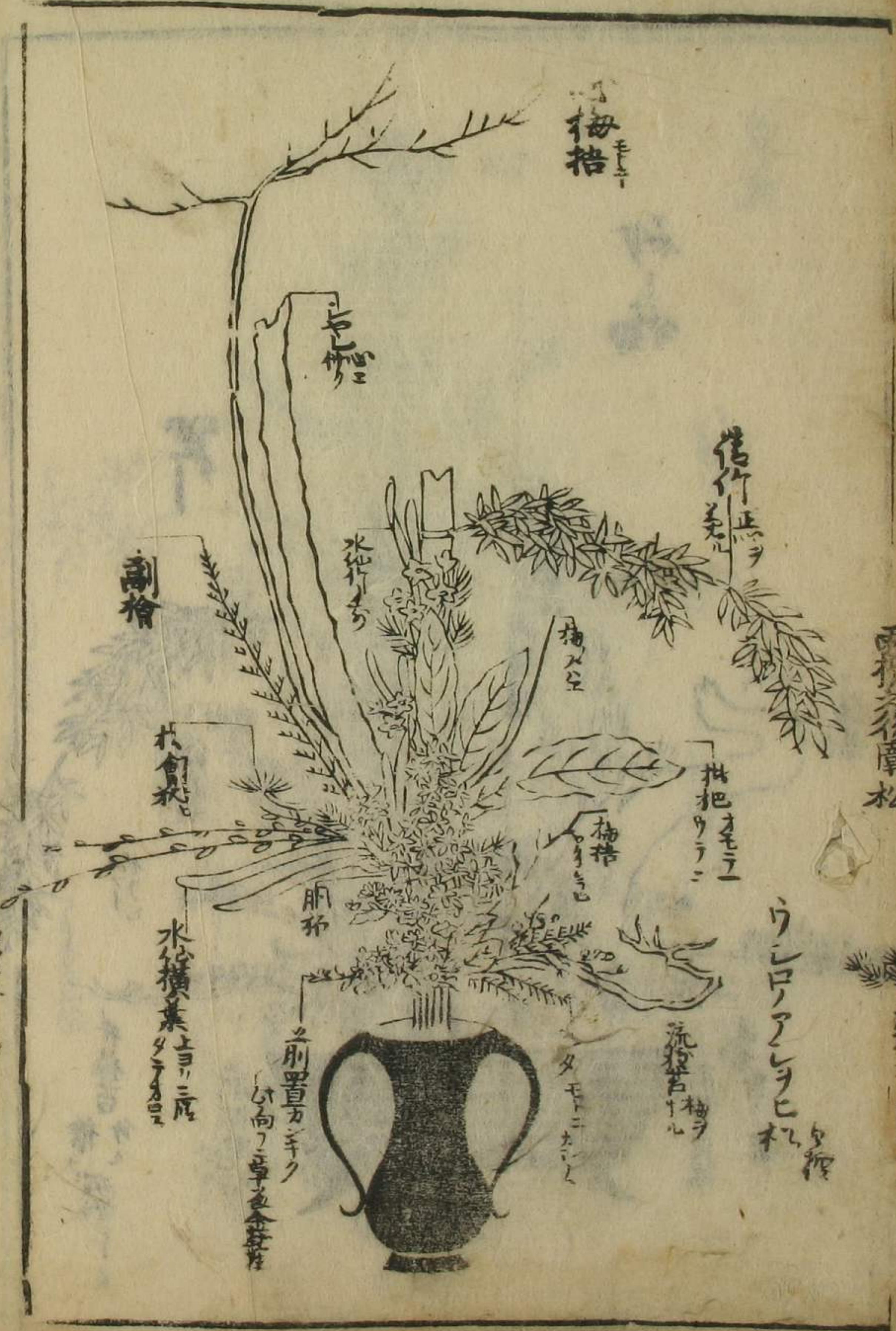
副太

元





四丁



梅格

古梅

信竹正

西嶺後園松

副梅

水梅

梅

松

枇杷

梅

瓶

水横葉

之別置カキク



夕モトニカシ

流石

ウシロアノヒ

梅

源

和梅



華道全書卷之四

目錄

- 一 生花未歴の事
- 一 生花小真行單二段ある事
- 一 不立之目録なる事
- 一 花の教の事
- 一 花教多教の事
- 一 花乃骨肉の事
- 一 花の生死の事
- 一 必乃強弱の事
- 一 花の清濁の事

- 一 花乃浮沈の事
- 一 花小位の段ある事
- 一 草と木と高卑の事
- 一 花よ上中下ある事
- 一 花葉枝つると合の事
- 一 花よ香経と彩々の別ある事
- 一 陰陽乃花の事
- 一 夜陰の花の事
- 一 庭前小ある花の事
- 一 樹およびて花の別ある事
- 一 花入の度度よらてせやうの事

一 掘るゑんの事

一 生花よ平湯に差別ある事

一 茶本せふすりらとちりらと事

一 茶葉枝と流る事

一 茶瓶の花は生あるの事

華道分書巻三

一 生花の古よりある事

一 生花の古よりある事。すなはち法式と立てておとしをひ

一 小東山義政公の御時より神代よりさかりも後初六角堂

池の坊立花の宗匠として傳授より才男と立ち

その中 抛入の茶の湯の花子月ひあり東山後継河津相

河津俊孝の御傳授光徳利休織部を以て十代の流

お傳て茶の湯の和流より世流の花と抛入の茶と波の

二 生花小真行草三枝の事

立茶の茶から法式と流くちりて立茶の砂の抛入の法式

を花より茶へ一抛入の茶の太くこれ持てひさしいれは茶の

の風情作意の御と茶をさして生る之山形流池の茶は

出せとて述べその分りふながいも或は抛入の本意とするこ  
扱すこと花の傳注も用ひるもは一瓶の花瓶一本の枝葉  
ふも本のおまなくして母種おほさすこと之の法は  
あづとこれたかろくおて抛入の本意然らばなり

三 不立以前目録の事

一 花を生んこよふ時ハ先一本花枝のありては  
さあどく見てありハと先わらひハ切恰好く見そ  
本どりといひよてくろと扱さす付入てわよと  
さぬぐりハ先試手ば月のさといふことよて抛入の  
意とまほ之文字とまうことハ書らる上とす  
よりわりかしてハ花はなりてハ

四 花の扱の事

一 抛入ハたさ花一程二程三程ハ  
ふ入の大小よあてかりあり牡丹芍薬ナハ花一輪  
葉一ツありらひてよりハ小輪好る花ハ敷の定りハ  
一それともふ敷るころハハさくかた  
わことささるるころハハさくかた  
續のゆもありて扱係よもかり

花敷葉敷の事

一 花葉ともふまをりて重と用さば  
六花六葉是をよて用す花一ツふ葉二ツ  
又葉三ツ花一ツ是ハ一それとも花二ツの肉一ツハ  
ハ一ツ葉三ツ花一ツ是ハ二房に房とも用るなり

花の骨肉の事

花の骨肉の事

花葉枝とも不敷おほくめごとやふ肉と付て生るあり  
又切捨てさむいよく骨斗と生るあり花葉と花入の大  
小よりなるその中多く生てかへれば花はいつが  
但敷号やかこの花ハ先たさかろくすすんは葉が枝

花乃生死れる事

花ハ天性の生死と人他の生死とあり枝葉葉とも  
うはハ一くいさくしてさつこあるは天性の生なり  
葉木の出生ふささつて枝葉葉乃なりとためると  
けさるごとく満せて生るハ人他の生なり花葉がさ  
らいつ時分ささななどハ天性の死なり花のさむさ枝の

く移り生はふささつてさり多数の入てかへられさる  
ははるぬ葉ハ人他の死なり

花れ強弱の事

花葉枝ともふいささひればよくつんとさるさ  
よの花はさつりふこ下へささる枝ふがハ枝葉ても葉ハ  
上のささるさむささささ系柳などハよささ相なれ  
さたまでお上へたの満するなり枝葉葉との人あへむ  
りあてささるはさハ陽よささしてさささかす但つ  
とてささるさささささささささささささささささ  
さささ事なり

花れ清濁の事

花葉枝とも不敷おほくめごとやふ肉と付て生るあり

かくるべきよしでなほりれ枝を花なる枝葉のなかく風流はし  
て花相法はなあひあひのなれどいふ濁にごといふはむさくこまもふも花  
いふくは濁法よて見所のなかくをこらうとふとよ

花乃浮沈の事

一 浮といふは上かみと下したをふまておちはずとあふまると  
いふ沈といふは上かみと下したをふまておちはずとあふまると

花乃位の位あり

一 花乃位はなのみちは下したの位ありいふは人ひとに就つ清浄けいじやうふして掬く  
するやふとていふは下したとていふは上かみとていふは中なかとていふは  
上かみとていふは下したとていふは中なかとていふは下したとていふは上かみと  
もたぐすといふは下したとていふは上かみとていふは中なかとていふは下したと  
ていふは上かみとていふは下したとていふは中なかとていふは下したと

こゝては花乃位はなのみちといふは下したとていふは上かみとていふは中なかとていふは下したと  
ていふは上かみとていふは下したとていふは中なかとていふは下したと  
ていふは上かみとていふは下したとていふは中なかとていふは下したと  
ていふは上かみとていふは下したとていふは中なかとていふは下したと  
ていふは上かみとていふは下したとていふは中なかとていふは下したと

花乃本と云ふ事

一 本もとは上かみと下したをふまておちはずとあふまると  
いふは上かみと下したをふまておちはずとあふまると  
いふは上かみと下したをふまておちはずとあふまると  
いふは上かみと下したをふまておちはずとあふまると  
いふは上かみと下したをふまておちはずとあふまると

花乃上中下あり

一 花乃上はなの上は上かみと下したをふまておちはずとあふまると  
いふは上かみと下したをふまておちはずとあふまると  
いふは上かみと下したをふまておちはずとあふまると  
いふは上かみと下したをふまておちはずとあふまると  
いふは上かみと下したをふまておちはずとあふまると

下を花にけむりたるはをさかり下手の上と申ふは  
と下ふいけをまぬりいけをすきりよまのぬり

花葉枝は正合の事

一瓶の用法と扱ふけに添はしても枝れいさむい引たり合をる  
やうふれ合てより記かり此はり合とたるすとすふありたよえ  
久まらるんはみどりつらこれなりきわりぬんはなうは  
くりのみしうきま字解さよくはりあつた一字の飛さ  
のふくしー熱してたふるは葉ありたるなり葉ふがつけ  
よくまものこ枝よまやう一八まさんかとはは信もまかり  
ふふ葉と彩もれ差別ある事  
葉強の花といふはやれうはうはうをぬく上は強伸のこ  
らんとと葉葉ふてまうはうとと葉葉ふてはぬるなり

のちり彩もれ花といふはけりひひかきりてあくみよんを  
うけくくはれやうを色ともと葉のほはぬるなり

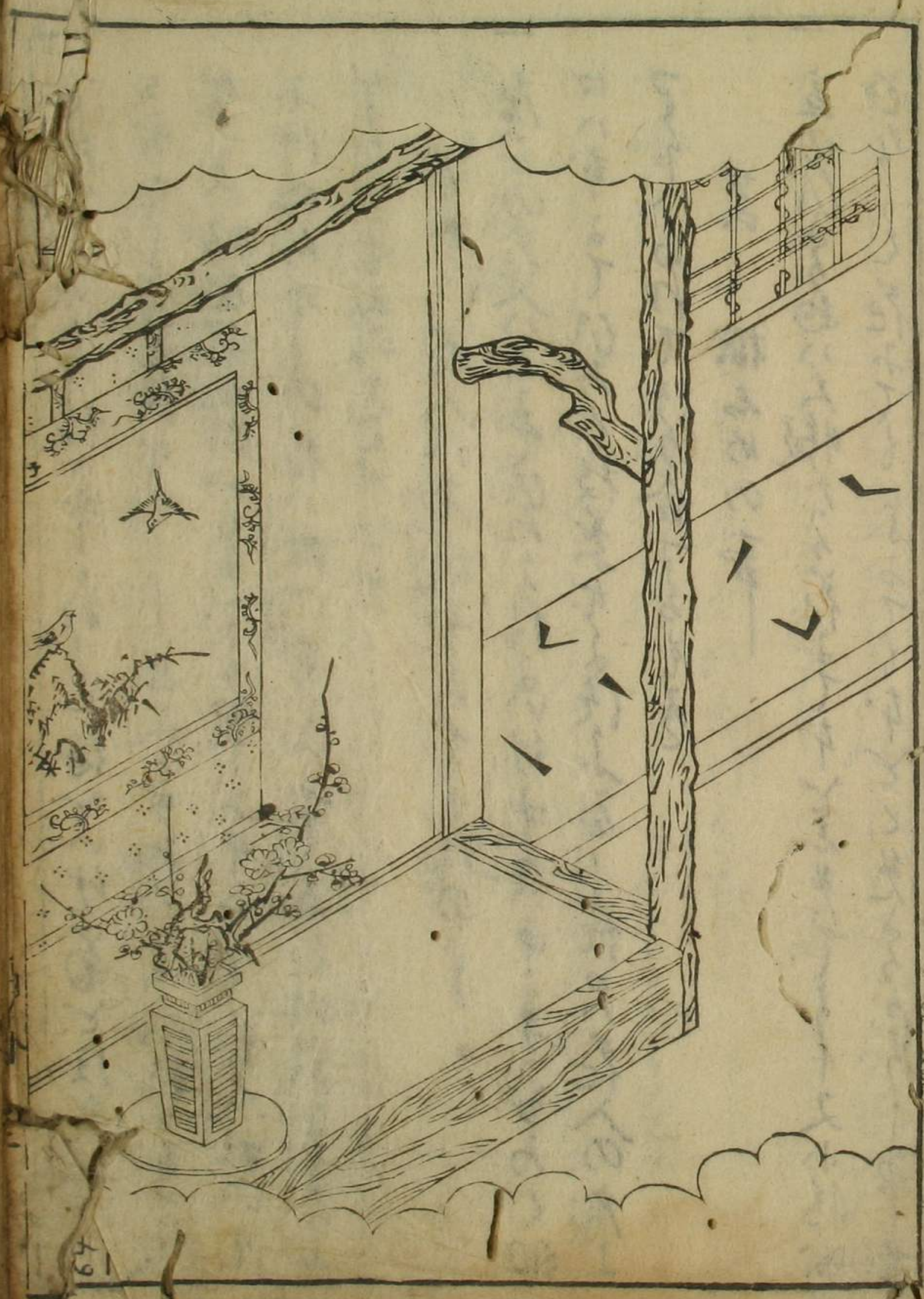
花一 陰陽の葉はくの事

葉の表ハ陽なり葉の裏ハ陰なりたての花入のたハ陽の  
葉右ハ陰の葉とけふてうーそれも細く妙な葉の物を  
者引なり敷の足ゆり注のまのハも注ふまごふるハ葉  
ぬも同あまハ陽注ハ陰なり登ハ陽をわやく表ハ陰を  
おほくはくわかぬるまはまなづむるすまさんざか  
うーあんまこれ葉のた葉れおまハ陽菊女席は木の  
細く花とありらうー

花二 表陰の花れす

花三 表ふむま生るうは葉のたけを





いさぎよしの花の枝のたふてハ秋のうつろひふんを母て  
 ぶりうー不葉のたうし見ゆやうふせはううー梅葉  
 秋のうーのかり

サニ 庭あまを花んほのり

庭前よみてあつたはせさうぐうーすさやかのの  
 梅葉あ仙のこしら名花ハ桂まーさ事

サロ 掛物よりて屯の差別ある

掛物の陰花なうえそれ陰ふあるとせさうす又何陰  
 てもあうそ陰よ赤さ花白さ陰よあうそ屯用持す  
 その中陰當なうえ梅柳子なうハ牡丹とせうがうー  
 秋のたあうバ掛物の方れんほるべー掛着掛物  
 法よ

一 梅は冬に花が満ちゆく時、新く咲く梅といけ菊とは花の母と  
うすなりうハ菊は生てうし又身物の法人取ら多秋  
なりうハ面眼目のかく色さうやうふせぬしむ人形の法  
ふ竹のんなるとの花ハ獄門もとりて、立花の家よりさうふ  
なりきさもあえさうなり

廿五 花入れ廣枝ふらうて生枝のい

一 廣口の花ハとよそいろく枝はいけ中は申すむろく細  
ハハ本よていろく枝葉共よはふるし細葉花入の腐よ  
ふらへあれてはり合するもあ

廿六 根あめの事

一 立のいさう物ハ大輪なる花よて本よて先てうし又小輪ハ  
さなりくと花よても葉あても本よとせんらうらうしあして

本よても葉よても茎とあらうぬらうとぬりあさのい  
てたう葉よて本よかくすなり

廿七 せもふ平角ハ差踏を事

一 瓶乃仕立に方面のハ持ちさうしあふも花う葉のあ  
らひさうし一板よてえさみさう枝ハ勢平れるはあ  
けし菊外ハ喜菊せうぬらす周はこ

廿八 草本よふ腐と知るさう

心の本枝葉のろくふゆるさすなりあひし合さうのあり  
さハ葉はさよそせぬれさあものこ一切の草木はあ  
面ハまうとくに定くむくあこのさうしこれ枝葉ハさむ  
さもせし枝乃肉よてかりふささ葉れむとさうし

花系枝とはなる

花系枝ともふ枝は愉快あり三月の首句と九月の首句  
むらりくこいあきと樹入の本まふいあうされもた  
いあうあかんた枝一様らあうて愉快と見合せ生は  
なり是れ上手下手のまは花も職ははやくも多すまた  
ふはれえまて種福ふはくとて並枝のありあうこ  
切て捨棄もあうてあり一様はよされこま花界とみ  
枝をとも火となくあら流れてむいてもあむこ

三十 花系枝の花生やうの事

花系枝はひろきいふあ一といふあう一枝葉ともふ水  
とてとされいよせあう三月の首句と九月の首句  
またりり生とていふあ一といふあう一はあ同ふとらもの

と見えぬ枝よせてう一航あろいのかと表してはけ係あ  
いへあひ左勝手よあて祝儀よさうとこあされよふり  
はるこ一並舟は花と糸の中あ生はあへあぬもの  
いひあて固よて見えぬ物とりあぬり

三十一 花系枝の花生やうの事

一 花系枝は多くもさやうふ生はあう一物舟あああ  
いひあて固よて見えぬ物とりあぬり

三十二 花系枝の花生やうの事

一 花系枝は多くもさやうふ生はあう一物舟あああ  
いひあて固よて見えぬ物とりあぬり

三十三 花系枝の花生やうの事

一 花系枝は多くもさやうふ生はあう一物舟あああ  
いひあて固よて見えぬ物とりあぬり

風が先の花入生やうの事

一 風が先の花入生やうの事  
枝ハおくれ方ハなひく根入生

たふおくれ花入生

一 たふおくれ花入生  
ちうけて生てうーわのきてころ時惚好するなり

早れ下の花乃事

一 早れ下の花乃事  
草の下ふも花ハ早れ是れおあそわやうふ生てうー若  
草と枝の面はさうらうんあへなびる

掛おれて枝の花乃事

毛さうけお乃枝ハ並花入うこ物のほハ花入つり花

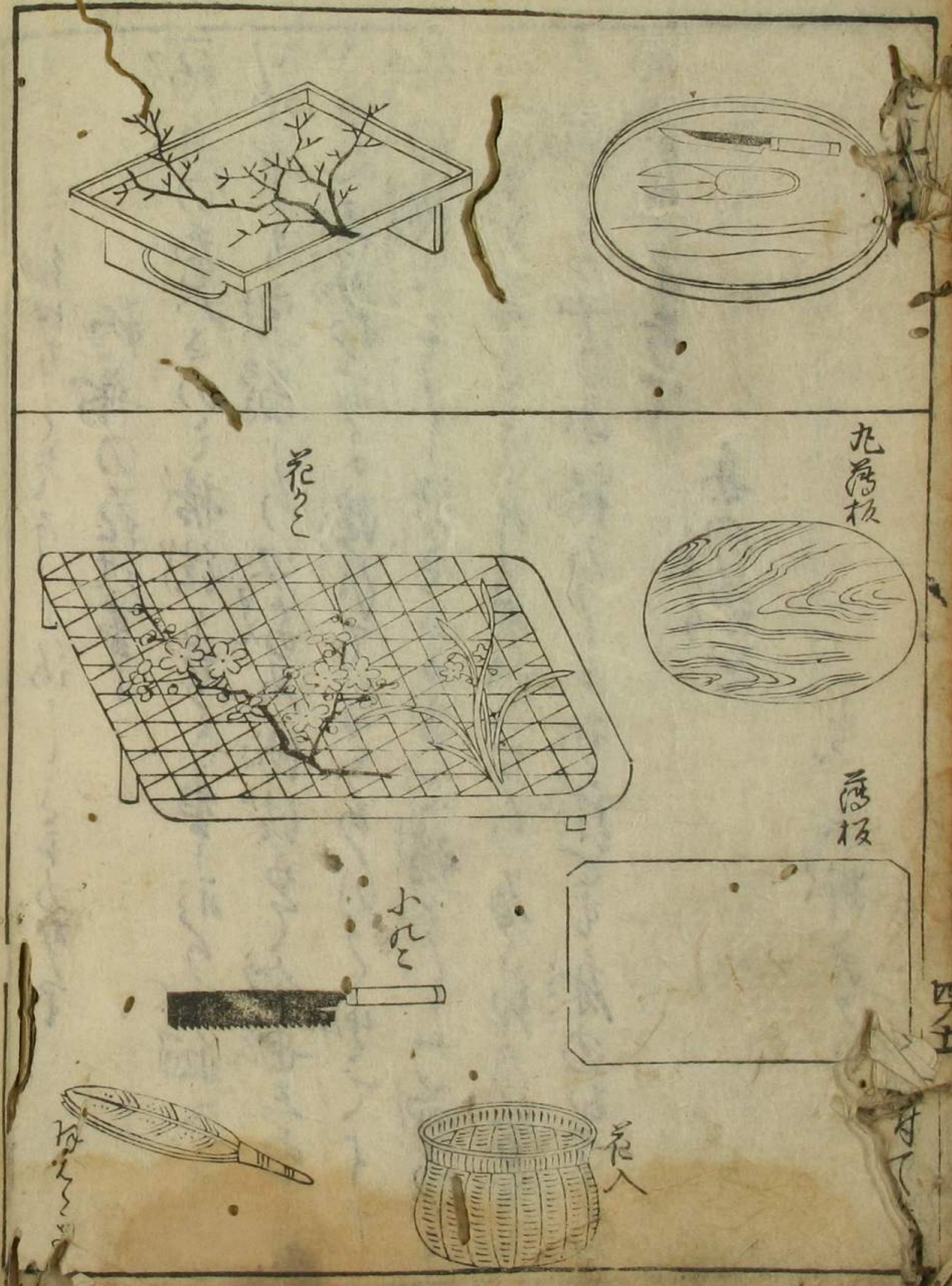
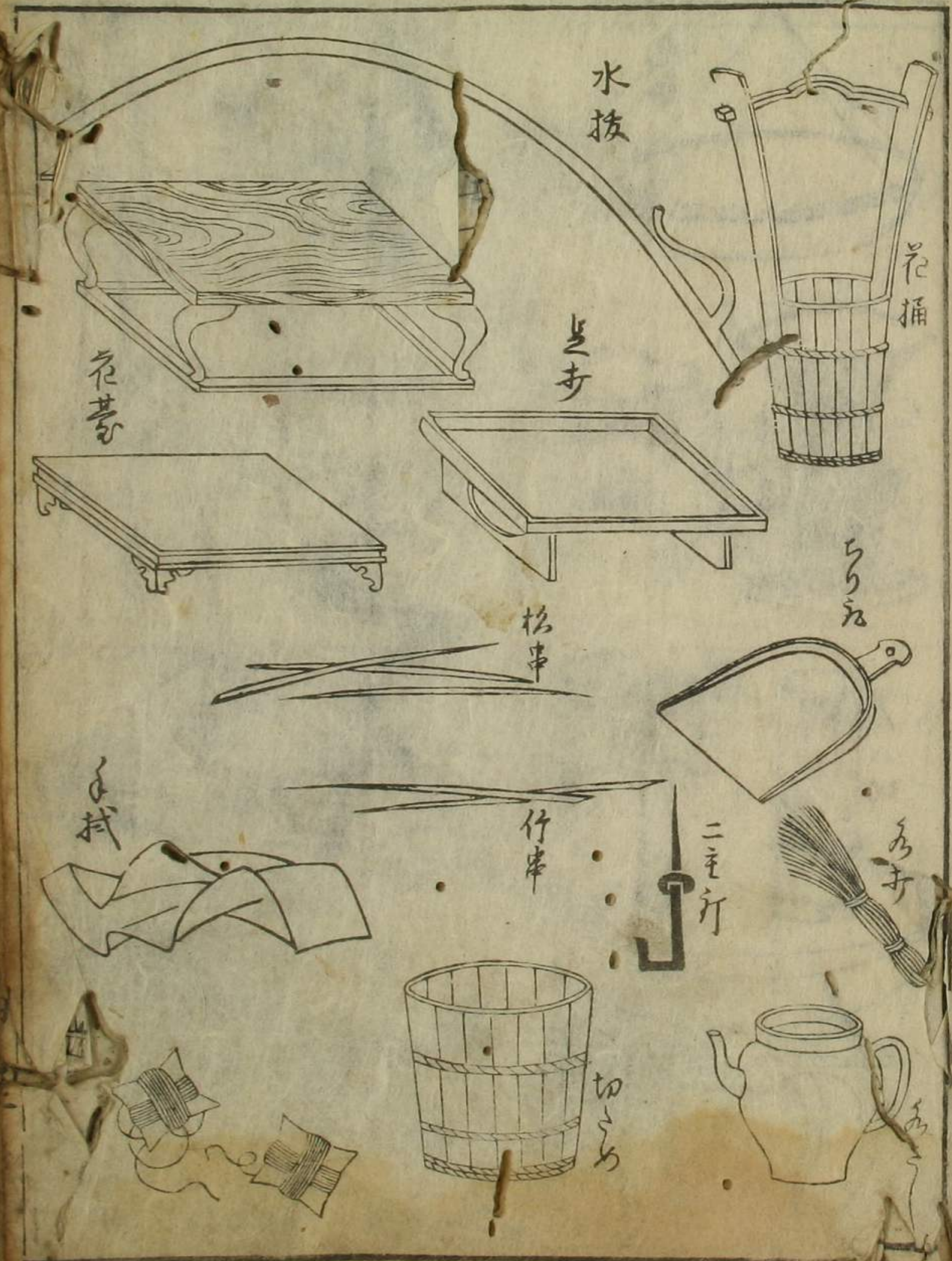
おへたる細はなしくあうーうあーうとあかな

舟船の花乃事

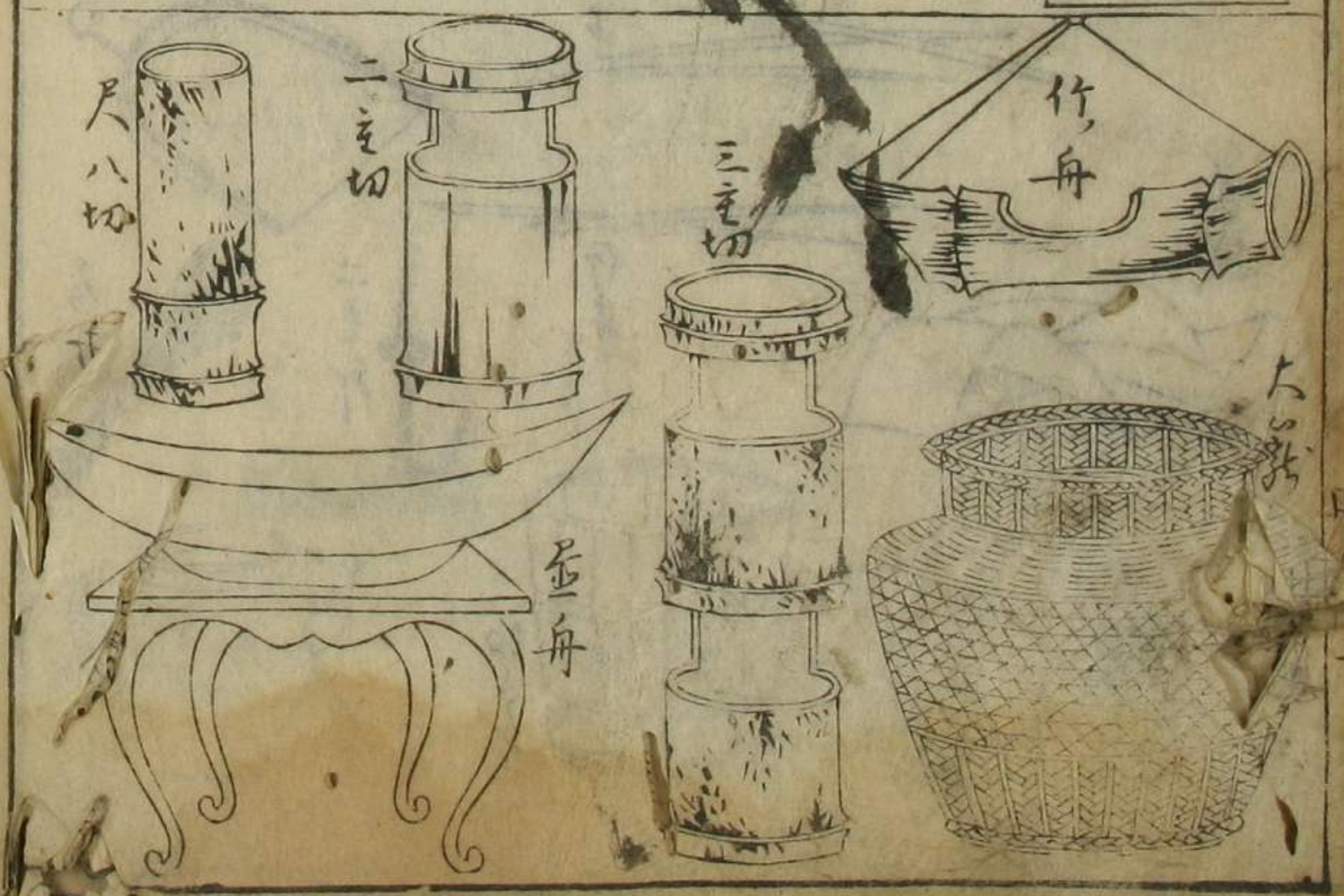
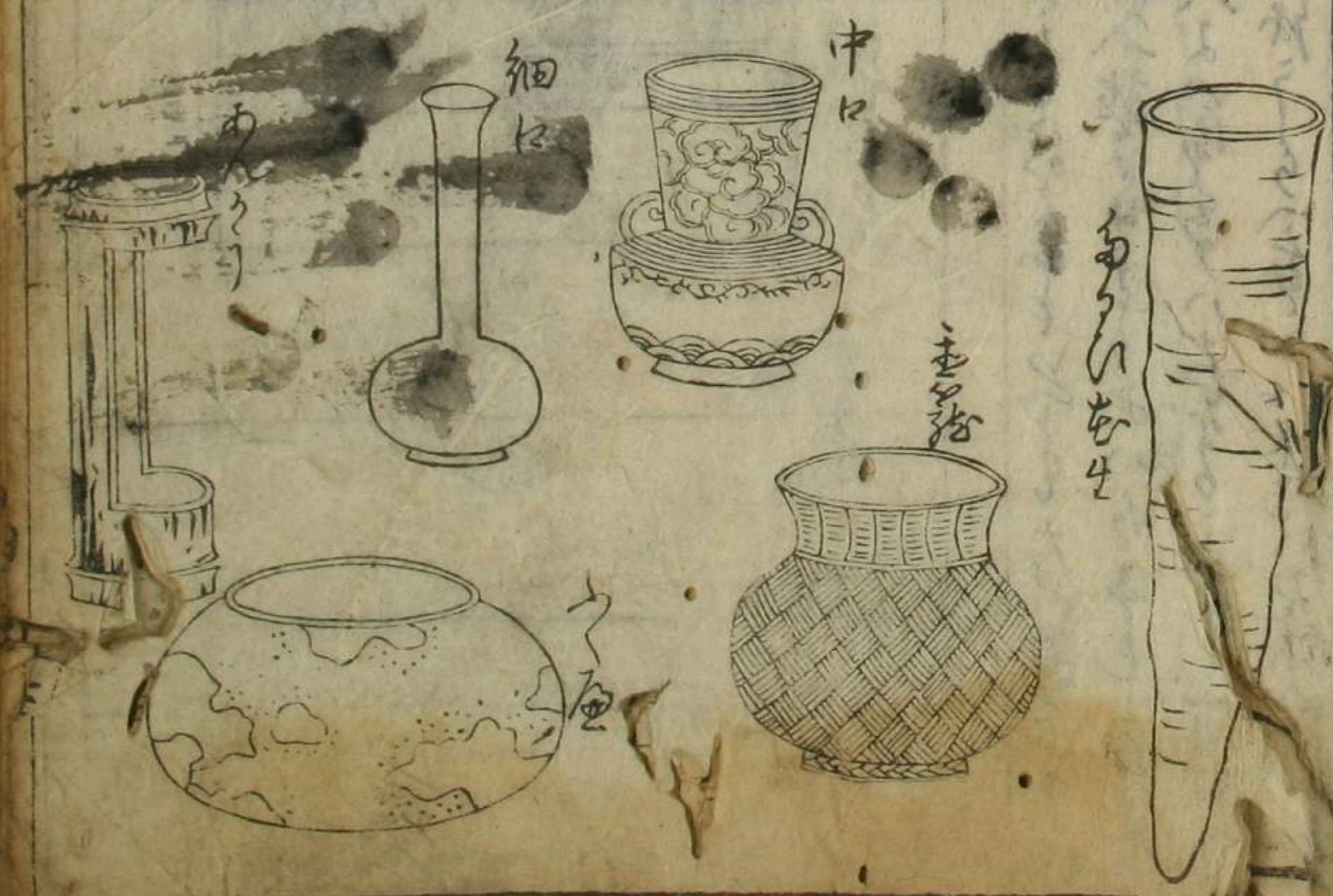
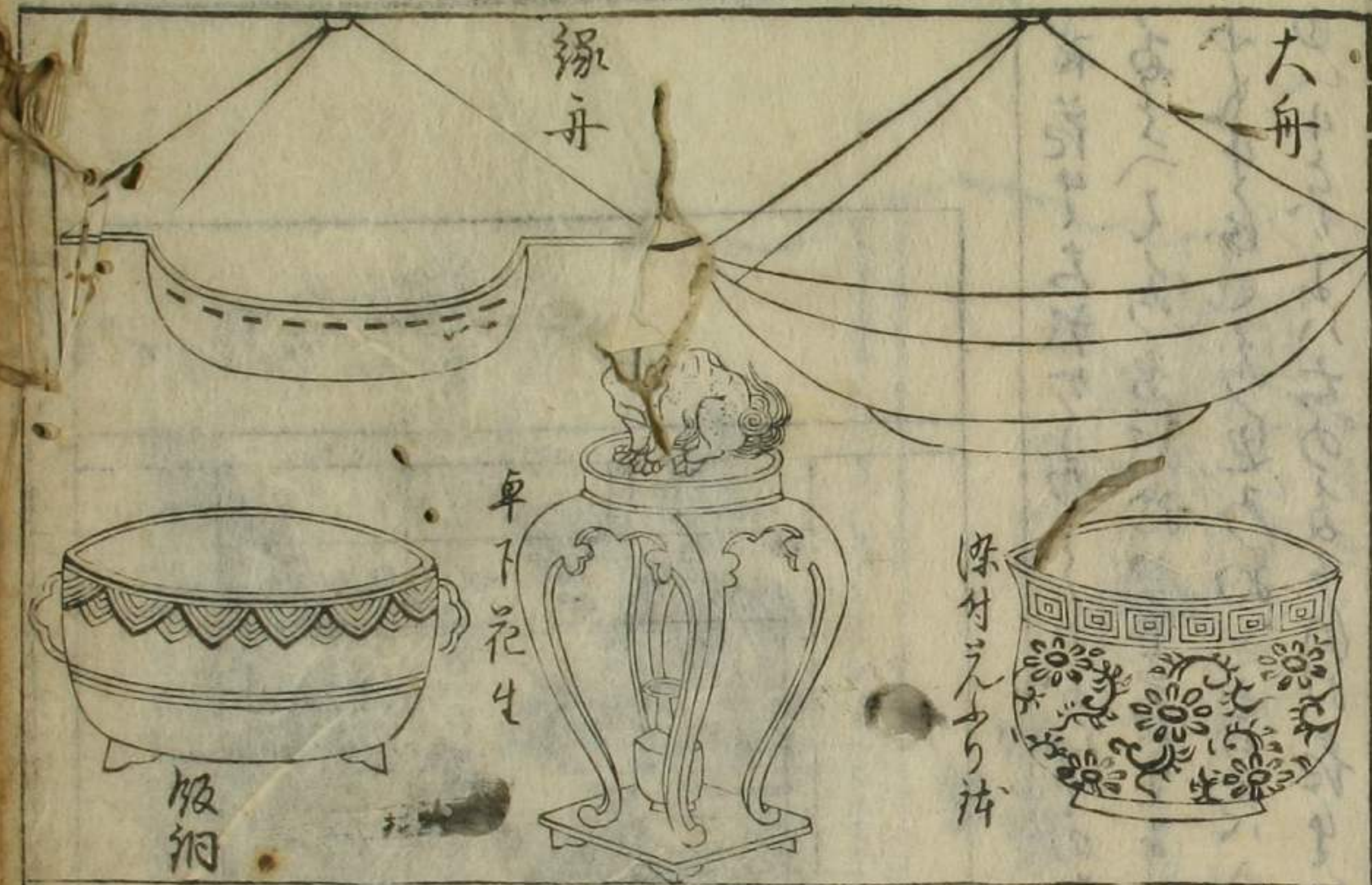
一 舟船の花乃事  
舟船のむハさのこ楳船もなり事形り出船入あひと  
し事事も窮窮より以てあ乃海はゆて今世まで用  
ざうこ只好むあよ隠ひてはりあひも生てうー  
舟の波二まじはさう方と船と一舟  
とままとるさう方用ひはりるる乃方と  
小船もるやう小物なう一折船とも麻のむけ  
の真中小あて

舟の波と

とく小掛

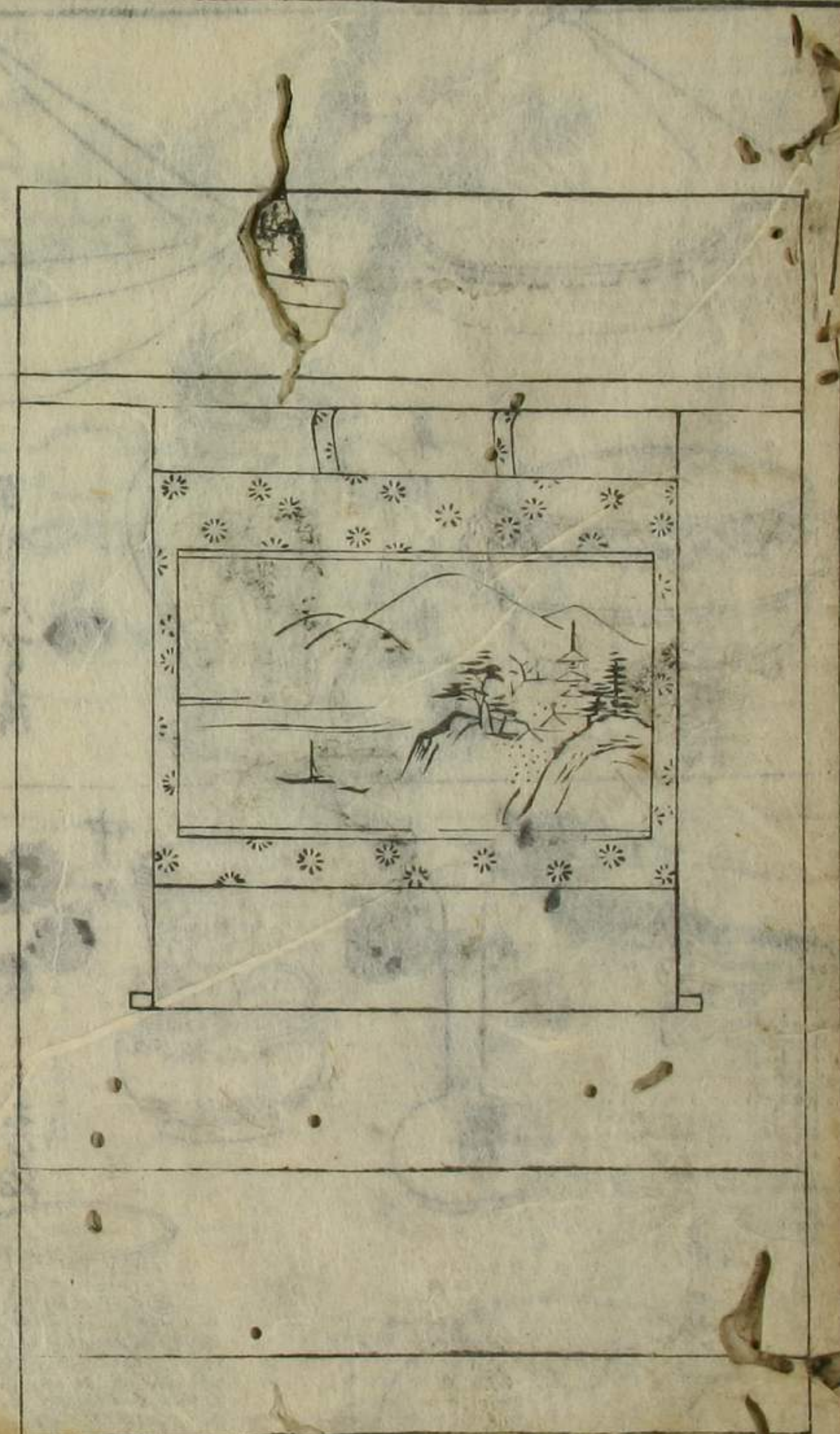


四十五





右花生る瓶かゝりしはけのなるとはかゝるしといふもたれまといふは  
 多しへんあゝおれおハ星花生るハ花よりけりおハ舟もくけり入  
 りも中へんあゝおれおハ星花生るハ花よりけりおハ舟もくけり入  
 りも中へんあゝおれおハ星花生るハ花よりけりおハ舟もくけり入  
 りも中へんあゝおれおハ星花生るハ花よりけりおハ舟もくけり入











華道全書卷之八

目録

- 一 花面向肖の事
- 一 猫口の花生やうの事
- 一 みぎ供乃花の事
- 一 女中并幼女の客ふれ生括乃事
- 一 佛事の花生乃事
- 一 洞伏の花の事
- 一 時ちりぬ花の事
- 一 村の好花并願の花の事并客意主意の事
- 一 ぶどうの物二欠いけらる事

- 一 藤の花のやうの事
- 一 胡那乃花の事
- 一 葉の花のやうの事
- 一 蓮の花の事
- 一 かうやのの花のやうの事
- 一 水仙の花のやうの事
- 一 牡丹の花生やうの事
- 一 樹の花のやうの事
- 一 牡丹の葉の花の事
- 一 柳の生やうの事
- 一 紫苑の花のやうの事

一 南天梅りごとの歌せやうの事  
 一 照葉系の種類せやうの事  
 一 及びおろ事  
 一 右長た短の事  
 一 新種接長の事  
 一 花の十病せ一たけく魚の事  
 一 花二実せしる事  
 一 花三見せる枝中せころら枝の事  
 一 花に枝のつでた縁切の事  
 一 花みけむむとの事  
 一 花六穂の口切の事

一 花七にっ子の病の事  
 一 花八月の播の事  
 一 花九アうごの事  
 一 花十あせ見の事  
 一 花合花の事  
 一 花人の花代おける事  
 一 花へ花取せする事  
 一 花板魚の事  
 一 花入よらて花板の花あわ  
 一 花花せやうの事  
 一 花花のつら花の事

一 家候の事

一 花くぐらるる事

一 花瓶よあさうやうの事

一 花よ露打事

一 花よ生る寸法

一 床の内花生かゝる付の事

一 茶本の花持やうの事

一 寄申れ花の事

一 水伝き菊の敷かゝひやうの事

一 人の所へきり花の事

一 花中付入用の道具 付 平仕懐中へ寄物の事

華道全書書

花面向宵の事

茶面ハ花右よりとりトリ人おそむさあがぐうま向ふ  
らむ付よりハ花おきりなり行かゝるもひひ流下花  
ひなり花のむさあかハかゝるかゝるむさあか  
さうよ花むさ花入の花ハあかのと掛入の花ハうつ  
むさばさ花入れハ花れりてうはむくなり

漏口の花生れ事

花口乃花ハ花よりとりトリ人おそむさあか  
さあとりハ花ハ花よりとりトリ人おそむさあか  
かゝるもひひ流下花  
ひなり花のむさあかハかゝるかゝるむさあか  
さうよ花むさ花入の花ハあかのと掛入の花ハうつ  
むさばさ花入れハ花れりてうはむくなり

かぢぬるうとあはれなり

みぎのり花のり

一元月梅 萱梅 福寿草 水仙 金盞花

上巳 桃 柳 山吹 燧半 石作 萱菊

七夕 傾城 梅枝 薔帰 菊 萩 くれかもしつと

かれとも 是是成本とすねて 巳時の花をぬくおきことと云

ハ梅草ハる竹 秋ハ菊をハ水仙と花の上とすなり

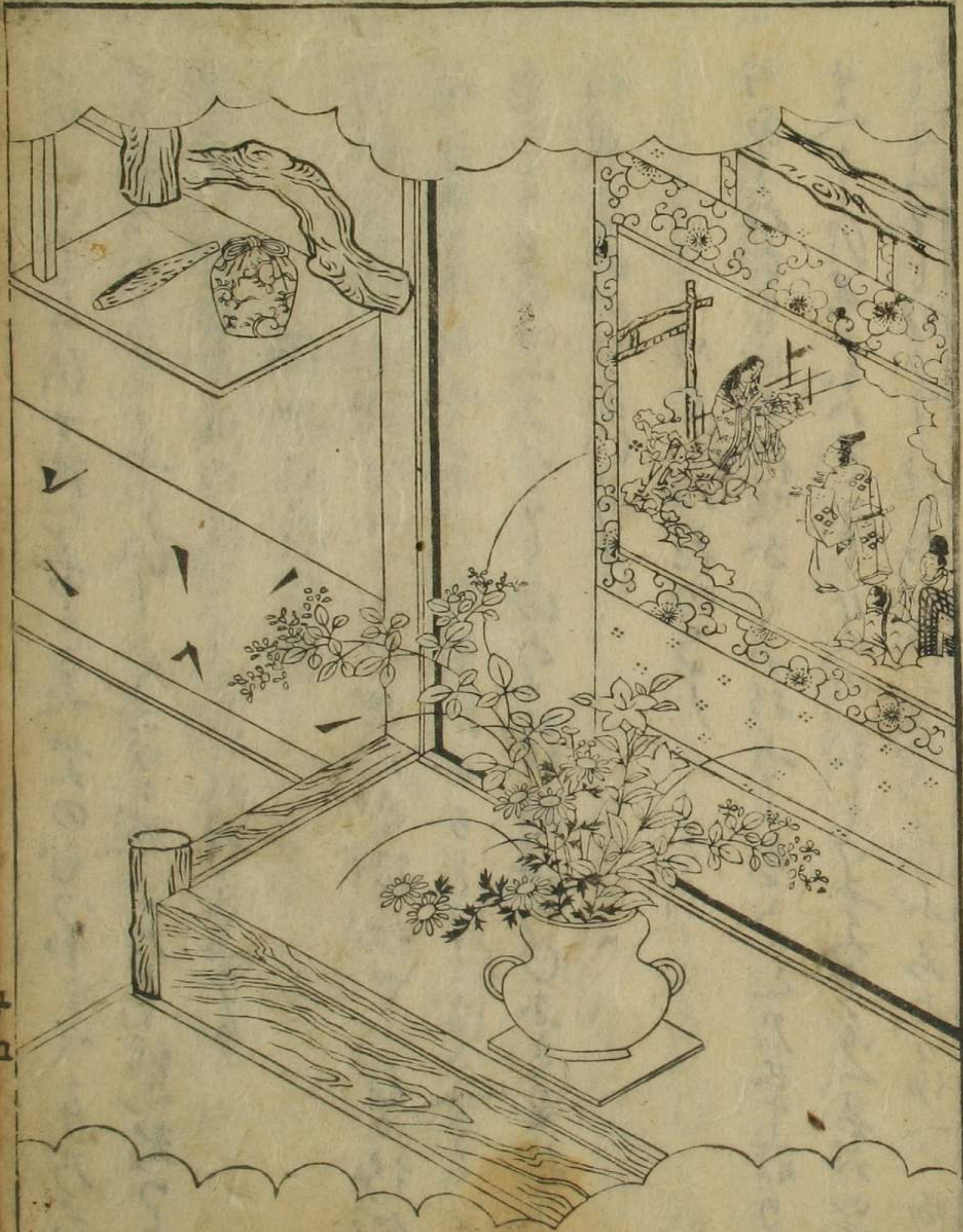
女中 并幼少の宿花の生植なり

一 女中 并幼少の宿の宿ハ茶敷多くあまやうふなり

てうはうくくいきんよう

仏事花のり

一 仏事ハ人の申陰ク朝忌法より 巳時の茶の白と花植なり



よのあけしうひて花と赤と花紫のむつわも咲き乃花の用  
さうなり只今すふさひしく見ゆ花より一花と想つとこれ  
花ふつむ形り後の枝とも花向れ枝とりあかり

凋伏れ花の事

一 凋伏とりハ紫難とまりえけ悪人を降伏せしむり後念難  
穢なり本所や薊乃をむ成用るとりけはとらさし  
るさうとのゆいなるのあつ花好とつひふも用於すの事  
但然生（あきま）の時ハ多し形

時なりぬ花の事

一 時ありぬむととれ咲ふとふお少くもさうと見事なりとも  
生く〜ぬ者もハさう〜（あきま）の表とりよまき少くはハいつけ  
てもさう〜かす〜（あきま）も同季候といふあつゆ〜（あきま）から

す今後花もけひお咲おかりゆへ生あへ

時乃花おぬの花れり并紫難と紫の事

一 時の花又ハ紫よりおぬれ花ハさうと見ていけるあつゆ〜（あきま）  
き主なきふゆ〜（あきま）上と〜（あきま）り又さく下座へむくも持ふ  
いけて〜（あきま）して紫難より紫難をよ〜（あきま）けり花ハさうれ  
枝と下座へささ〜（あきま）あつ紫難と紫難といける花ハさう  
〜（あきま）の枝と上座へささ〜（あきま）枝のかりよ〜（あきま）必と〜（あきま）  
か〜

さうり也二色のけさう事

一 さうり也一色よ二程わけさうり〜（あきま）き紫柳さうり也  
紫若梅竹の紫さうり〜（あきま）紫の古枝あ〜（あきま）さうり也のさ  
れ〜（あきま）さうり也よ〜（あきま）なり

藤の花のけやうれ事

一 藤の花より登まてのあふひけぬうらうら登あまたハまじと  
むらありのなりくさこの本とくたひしきそほきて生へし  
根花の花ハ二處に腐ともさうりぬこれの枝あくにからせて  
風流よ生らりもぢりしうさおかり

胡蝶の花のけやうれ事

一 胡蝶の湯よあさく月といけり時ハむと先よ生て  
現出て後の聲よ掛おとけりしき皮付より木の枝  
よほつひつるせて生らりしきあれ花よはりしり内ハつや  
あてあえよさすりとはやそのむらうくやうよ生ら成りさ  
すり形り時分とよくかんふ合せぬをれ湯と入そゆきはその  
ゆくむらうくありあしてあさくこれ葉の湯とあよまき

くさハ害もほかちやくゆくうら記をて胡蝶ハさくむらうくもの  
祝きうあしき時よいけぬ花あり

紫の花のけやうれ事

一 紫の花を園の花よ紫ハいけぬ也とりか徳を是ハたまりの  
よやひとわらそよゆ形りむくぬきさ上へのむさそて懐おせ  
ゆりの之あうゆつふ本と押切く本のさくさ成位よりお  
して生らりしきさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
れ人のいけぬ也とり

蓮の花のけやうれ事

一 蓮の花ハ二世成るうらうらいけりうらうらをちすハ成むら  
こころ花ハ現世つがもハあまなりけりさ成れ合て生へ  
心入ちのさくしてむ一移りし上わけさくハ半むらうさくさくさく



一ツはさき一ツまで生ても二世のふよなるはかしくいけり付は  
必三世ふも如くうさるも一葉まきさき一ツまでいけりごとく  
むくことろなまはいけりうさるも一葉まきさき一ツまでいけり  
大なる花花の物許あどの涼くむらさきは根もふゆき  
て種わしい砂いけりあすまは一日れどハ九葉もあや色さうさ  
ぬきハみさの物まておの花とゆつとゆつとゆつとゆつとゆつと  
と色まうさ試いふんれわろ席あうさ夏菊とまていけても  
よきと一りくむひり菊とちほれ流のそとあもれりうまん  
はたあのことふよりてこ

かうちのの花生後のも

一かうちのといけりまはゆきまふ漸とさうていけりうさるも一丸  
あハかあうけ生ぬ根もふいさうハ者者にさきと同一は

も二日も二日も持ては花名わさきやあうさハあう

水仙の花生後のも

一水仙の花はひやうちを花名わさきやあうさハあう  
夜也のありとけりあうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
一多葉に葉ともさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
まきくれまは二葉よりとハ生ぬのこととま山屋のゆり  
まうとけり

杜若生後のも

一杜若の葉のつくは花名わさきやあうさハあう  
あきさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
叶ハ白紙下みまきとよさうさうさ

杜若の花生後のも

一 桂ハたゞと花とを茶とをむきさてあつたおとちがひ桂ハその傍  
うらゑ茶試飲見世してらびりかす際際のみららふもおては  
左と右同一ヤリれをあらうと一方ハひかへてうらゑ茶の  
ちハ花はよくして落ぬおの味をふかすは不きふゆりて落  
そのちろろゆゑは物陳そ遠出家の入際用さるゝ新お花  
なりハ落もすゆゞ々をせ世よそのちかへあつた用ゝた

牡丹為茶の花のち

一 牡丹為茶ハ大牡丹ハ又新花を生るゝやふをさ試切て本  
と尖ふお花とやさてせらるゝやうに種をゆりて牡丹ハ古と  
種とほけていらるゝやうにこゝろとこゝろも尖ふてやげんた  
ふし及さうその内牡丹ハ甜晩花のちちゆひゆめ牡丹のち  
うせらるゝハお花よゆゞ々お花の漸こゝろを尖ふてやき

水よつけおへー牡丹ハ為茶のちとらそて用てもうー二を  
ともふ落といおのちゆは成つてすやう

柳の生種れる

一 糸柳ハちろろおなれとも枝先と上の方へまてせらるゝや  
ー十月一日より三月三日と月ゆると花をさりのおれハ様を  
のちとあひしらひくひけらるゝやう

女苑 錦織 ちりしの種生種れる

一 ちとんけのちろろちりしハお花とちりして花ハすくふあ  
ちろひゆけらるゝやうにちかもたうとそちの種を

柳 大梅りし種生種れる

一 柳大梅柳ハちろろちりして花のちちちちちちちちちちち  
あゝらひていけてよう何れとちちちちちちちちちちちちち



廿三尺さう枝中とさう枝のう

他の枝とびく十あまりふん切るすさうらふと友切とて一本の内をばらうかすすといもわさこお又花ととの葉とれるふおのおとさほさううすと申試さうといひてさうらふ

廿四枝のはさう縁切のう

一本八本葉の草と片切てそのまんの切をかれらうハさうらふありむ同一おのつとさう二あよさすともさうらふと本とさよと九合て別枝と枝のつとさうらふてさうらふと想してたたれ方お枝のうら切えあさうらう縁されよ敷てさうらふすさうてはらうかす

廿五ばむといふ

一本八本のうとつけさうらふとの縁とさうてさうらふさうらふ

廿とびおねんつとびといふよ敷てさうらふ

廿六瓶のう切のう

一あさうを枝をさうらふて瓶のうよわらうを中とさうらふ

廿七口つちのあれのう

一口方へ出は具の面とよおさうらふてわりくとさうらふと口つちといひてさうらふ

廿八月の移れのう

一まんのくさ西まんの上へさうらふらうてさうらふと月の移といひてさうらふと相さうらふといひてさうらふてもおがへ出は具とさうらふ

廿九つとこのう

一上下知らくお知らけて申してさうらふさうらふなりとさうらふことといひてさうらふ

廿十ふらとんせとりの事

一 ちやう鳥家森茂をよのひら繁を養れよと不出は時あ  
ぬとも先へ松とも多とあうさむけてはくあやうさふれを養  
うまてて紫の飛んえさうと

右の十あふけていけらうと

考合花の事

一 考合生の時ハ上母の方より初ん松方へあらまのこそののり  
一旦神遊してその上までゆりあくハ初んあつたさうりさ  
しうてより下座へ降りたのひさとあてくまふくせし  
但より花とておしかくる

夫人の名代はいけらう

一 夫人の信よりうて花いけらうと樹がとうけて生る

枝葉のれあも仕をこあひなとあうよまづふりけらうと  
但よりあづいけりいけらうと

あへ花あらとまらう

一 さいのかりは打ふむと程う又ハお終七終よても茶葉枝  
ともつこのし終とれ合並又あかりあつたてとてあはれよ  
あへ入お終ともかこらふあらう

落板と雨の事

一 うす板よのせよりあけあうは落板と其のま中より目  
二つあつたの方へよせてあへ一 早下のまこと但せりよかれ  
なるとあおの花入う又主人より終りう花入おらん其のま  
中より目二つあへおしてあくあう一 落板のなさを入も  
はらけらうと一 照してあへハ落板と雨板よはらけ

紙不用之けのむきくふ入とむきまのすうにあらはし

ふ入ふらりて落板のまふあつら

角なり花入なりと丸を落板をさむ合のうら角や六角  
と丸ら

生花まきやりの事

生花のり花ハ毎朝あどかううらうらうー 墨室の叶ハ一日  
乃内ふも折くまどくむまふふかろくまどくまどくは  
仙翁殿後節更の致ハ切にせやと節とせむーこまて  
生ーまどく

墨室の時から花のり

一 墨室の時から切くまどくをてうー 墨室をふらりあつて  
まどくをかりらハ次あふ入まハいさせらぬ



梅桂より仙草梅木等へ入てゆく事をいふなりと  
ふくせしうつがしあむむひしうぬこ

花をうつこのしるし

抱入ハ本のうきとありしうきとさらし風流とわたりてい  
あひと書とすうと書がふ枝う葉と折入てむらとすうや  
うらふ並付るこま花のうきとこみうまハ用さうう  
その中入子よ竹の筒と入てそのはれはよ十ふまう井  
けこのうきなりふ竹筒とすうと書さううす此  
なごの風の吹こむ亦ハそのうぬあうとすうし

花瓶よあさし瓶のしるし

夏かゝハ瓶のうらふ油氣とすうと書とばぐぬりうらふ  
ちりとふあ入りのこまハあ次よてはくと冬ハ四樽よつぐり  
ようその内九月九日と二月二日とハ花瓶廣は木のあさく  
足ゆりゆハ用捨すう細口かとお生てすう

花よ家あさるし

花とすうそのてハ書とあさるすうすううきとすうはハ  
うきとゆりこ書磁やあぐたのぬよけらる花よハあさる  
あぬよもいよ書よあのからぬやふおさうりよとす  
竹の筒葉の類ハあふあさるしてかへりうらりとぬ  
なうぬこ

はるぶ花を生けす法

はるぶハ梅とすうハのいろとすうハがけあさハ分鹿のひ  
ろとすうハ分鹿のりとすうハはさ書しすうあさるしはハ

かうらみはしび滝はくらまよはをさうりよてもいさなを  
ニツはるゑハ本のかしとトのなうらよの万をさうりよて  
三分一と三分二とふは多のよにわらやうふいさな一ツは  
るはハ二か一よわうらう—それよ小懐好津也

茶乃内花生かられ釘のう

茶の内か入かは釘のすは下より三尺三寸釘ハ茶のちから釘と  
茶の内強付かして茶の内れ釘ハあふし雲探とくしてそれよ茶  
せとくはとれたのねよから釘と茶のちより三尺三寸す守茶  
のちわするへ—取茶のら盛形とれたのねよから釘ハ茶と茶乃  
ま中よから釘ハ茶と銀珠の付とくし掛入茶の取茶ハから釘よ  
まよららると茶とを代ハ二寸釘よてのけとくまよら茶のあ  
かりてをさう—

茶乃内花わらうのう

茶の花ハさうとゆよ茶乃のちハ銀珠よから釘と茶とを  
るさうとく杜茶の取ハさうらう—

取中れ花のう

茶中れ花ハ茶ハ茶へか—取ハ取茶の茶を茶れと茶よあさ  
とらうらう—茶も茶と茶とまよて二回りかあうと茶のこわら  
ぬれよのわらうまよらふあうらう—

茶仙を茶の取かひやうのう

茶仙を茶ハ本とめ茶ははむく竹の節をさうふあて入  
水まのこわやうふらう—相の茶へ入あて茶のこわ—茶とて  
かほとるり風のふ入やうふらうとせん三十日あかりもそれこ  
はあし





